法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

「資本主義以前」(『資本論』第3部第36章)の草稿について(下)『資本論』第3部第1稿の第5章から(完)

OTANI, Teinosuke / 大谷, 禎之介

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
経済志林 / The Hosei University Economic Review
(巻 / Volume)
70
(号 / Number)
3
(開始ページ / Start Page)
119
(終了ページ / End Page)
211
(発行年 / Year)
2002-12-05
(URL)
https://doi.org/10.15002/00003153

「資本主義以前」（『資本論』第３部第36章）の草稿について（下）

――『資本論』第３部第１稿の第５章から（完）――

大谷　禎之介

目　次

はじめに
1．　第36章の草稿，それとエンゲルス版との相違ないし関係
（以上，第69巻第４号所載）
2．　第36章の草稿について
(1)　草稿の状態
(2)　以前のノートの利用
(3)　ノンブル変更から推定されるページの入れ替わり
(4)　第３部第５章のなかでの「6)」の位置
(5)　利子生み資本と高利資本
(6)　高利資本の発生とそれの特徴的な存在形態
(7)　前資本主義的生産様式の破壊者としての高利資本
(8)　資本主義的生産の生成に高利資本が果たした役割
(9)　利子率の強力的引き下げのための闘争
(10)　利子生み資本の包摂のための信用制度の創造
(11)　信用制度の歴史的意義
あとがき――第３部第１稿第５章の考証シリーズを終えて――
（以上，本号所載）

2. 第36章の草稿について

(1) 草稿の状態

1で見た,『資本論』第3部エンゲルス版の36章に利用された草稿部分は,「6)前ブルジョア的諸関係〔Vorbürgerliches〕」という表題をもつ,「第5章 利子と企業利得(産業利潤または商業利潤)への利潤の分裂。利子生み資本」の六つの節のうちの最後の節となっている。

草稿の状態は,この部分に先行する,「5)信用。架空資本」のうちの「Ⅲ)」(moneyed capital と real capital)や「混乱」に比べれば,外形的にははるかに整っていると言える。すなわち,1ページ(草稿400ページ)を除くすべてのページが,上半にテキスト,下半にそれへの注という使い方で書かれている。

しかし内容的には,テキストとして書かれたと見られる上半部での叙述も抜粋ノートに近い部分を含んでおり,しっかりした構想にもとづいて仕上げられたものと見るのは困難である。テキスト部分の記述も,全体としては大きな筋道が認められるが,しかし,すぐ見るように,前資本主義的諸生産様式のもとでの高利資本についての部分では『1861-1863年草稿』での記述をかなり利用していることもあって,そうした筋道をしっかりとした足取りでたえず前方に向かって進んでいるとは言い難く,あちこちに,思いついた事柄を書きとめたと見えるところがある。注にも注番号が書かれているだけのものもあり,あとから手を入れる作業をしたとは見られない。このような意味では,この部分もやはり草稿性がかなり高く,マルクスがここで書こうと考えていたものからすればなお未完成なものにとどまっていると見るべきであろう。

なお,この6)の末尾には,区切りの横線を引いたのちに,1865年10月11日に発表されたイングランド銀行の報告書からのメモ書きがある[1]が,こ

の部分は6)とはまったく無関係である。ただ，このメモ書きから，第3部第1稿の第5章が遅くともこの日，すなわち1865年10月11日以前に書き終えられていたと推定できるのであって，その意味でこのメモ書きはわれわれに重要な手がかりを与えてくれているわけである。

(2) 以前のノートの利用

前稿（上）に注記したMEGAの注解に記されているように，マルクスはこの「6)」の執筆にあたって，『1861-1863年草稿』のうちの「利子生み資本」についての部分[2)]を大いに利用した。かなりの手入れはあるもののはっきりと利用して書いたとみなすことができる箇所を含めて，『1861-1863年草稿』を利用した部分は，その行数で見ると，マルクスの原注を含む「6)」全体のなかで約30%にのぼる。

ただし，『1861-1863年草稿』を利用して書かれた部分の内容を見ると，そのすべてが，資本主義的生産以前の時代の高利資本そのものにかんするものである。したがって，「6)」のなかでの，産業資本が高利資本と闘い，信用制度を創造してそれを自己に従属させていく過程にかかわる記述，資本主義的生産様式を最終形態にまで発展させ，アソシエイト的生産様式への移行の槓杆となる信用制度の役割についての記述は，それらのほとんどがここで書き下ろされたものと見ることができる。

このほかに，J. G. ビュッシュからの引用がロンドン・ノート第4冊から，またジョン・フラーンシスからの引用が同第6冊から取られている。

---

1) MEGA, II/4.2, S.664；拙稿「「資本主義以前」(『資本論』第3部第36章）の草稿について（上)」,『経済志林』第69巻第4号，2002年，231-233ページ。

2) MEGAでは，第2部第3巻第4分冊所収の「収入とその諸源泉」および同第5分冊所収の「商業資本。貨幣取扱業に携わる資本」にあたる。

(3) ノンブル変更から推定されるページの入れ替わり

この草稿部分には，3枚の全紙（Bogen）が使われている。各全紙は，二つ折りにしてできた二つの紙葉の表裏をそれぞれ1ページとして使っているので，4ページとなっており，3枚の全紙で12ページとなるが，最後のページはノンブルがあるだけの白紙であり，テキストが実際に書かれているのは11ページである。

草稿の各ページにつけられているノンブルは，すべてのページについて，重ね書きされており，読みとれる最終の状態では，1枚目の全紙（第3部第1稿全体では100番目の全紙にあたるので第100全紙と呼ぼう）が393から396ページ，2枚目の全紙（第101全紙）が397から401ページ（399ページは欠番），3枚目の全紙（第102全紙）が402から405ページとなっている。二度重ね書きしたと思われるページもあって，最初に書かれたノンブルがなんであったのかを読みとることはきわめて困難である。MEGA編集者は異文目録のなかで，第100全紙については，385（末尾の5については解読に確信がもてないとしている）→393，386→394，387→395，388→396という変更が，第101全紙については，391（これについては解読に確信がもてないとしている）→397，392（これについては解読に確信がもてないとしている）→398，389→400，390→401という変更が，また第102全紙については，394→402，395→403，395a →404という変更がそれぞれ行なわれたと記している。MEGAには記載されていないが，第102全紙の最後のブランクページでは，395b →405というノンブル変更が行なわれたと見られる。

この草稿部分のすべてのページについてノンブルのこうした変更が行なわれたのは，この草稿部分を書き終えたのちに，この草稿部分の前に全紙を1枚追加挿入したためにノンブルに手を加えざるをえなかった，という事情によるものと考えられる。挿入された全紙は第99全紙となったが，第

98全紙の最後のページは384ページであり，マルクスはこの第99全紙の各ページにはじめそれに続く385，386，387，388ページというノンブル（つまり第100全紙の各ページにはじめつけられたノンブルとまったく同じもの）をつけたが，このうちの386，387，389ページを390，391，392ページに変更した[3]。そしてこれに合わせて，続く第100-103全紙の各ページについても，それらのノンブルを393-405に変更したのではないかと推定される。

ただ，上に見られるように，第101全紙で397-401と変更された各ページは，変更前には391，392（ただし，以上の二つについては編集者は解読に確信がもてないとしている），389，390となっていたのだから，これらのページの執筆のさいに後者の順序で書かれたのだとすると，このノンブル変更のさいにページの置き換えが行なわれたのだ，ということになる。これらの4ページが，389，390，391，392ページの順に書かれたことはほとんど確実だと考えられるので，ここでは，389および390ページの紙葉と391および392ページの紙葉との入れ替えが行なわれたのである。そして，このように入れ替えられていた「6)」の全ページについて，第99全紙の挿入に伴うノンブル変更が行なわれたわけである。

それでは，389-390ページと391-392ページとの置き換えはどうして行なわれたのであろうか。前稿（上）での草稿訳文では，これらのページを，この置き換えが行なわれる前の状態で掲げている。すなわち，389-390ページは，前稿（上）の200-212ページにある草稿（最終ノンブル）397-398

3)　追加挿入されたこの全紙に書かれているもの（MEGA, II/4.2, S.645-646）の内容は，拙稿「「貴金属と為替相場」(『資本論』第3部第35章）の草稿について」，『経済志林』第69巻第3号，2001年，172ページの最下部から182ページの「稿末注」の前までのところに該当する。この先稿では触れなかったが，この全紙が，「6)前ブルジョア的諸関係」の執筆後に挿入されたものであるとすると，そのほとんど末尾の部分にある有名な，「Creditsystem は Monetarsystem という土台から解放されない」ということを述べたパラグラフも，その前に書き終えていた「6)前ブルジョア的諸関係」での記述（とりわけ，拙稿225ページ末尾から226ページの末尾までのパラグラフ）をも念頭に置きながら書かれたものであり，したがってまさに第5章全体の最後に書かれたものだった，ということになる。

ページで，また391-392ページは，同じく前稿（上）の189-200ページにある草稿（最終ノンブル）400-401ページで，それぞれ見ることができる。筆者の見るところ，これら諸ページの記述の内容からすれば，このような入れ替えを行なうべき理由はまったく見当たらない。それどころかむしろ，これらのページは，当初の順序で読んだときにはじめてそれなりの一貫した文脈をつかむことができるように感じられる。先行する第100全紙の最後のページである388ページでは，支払手段としての貨幣の機能が高利の本来の地盤であることが述べられていた。当初の389-390ページでは，引き続き高利資本そのものについての歴史的記述が行なわれている。それに続く当初の391-392ページでは，その高利にたいする反作用として信用制度が発展していく歴史的過程（12-18世紀）に記述が進められ，最後のところでは，チャイルドなどの高利にたいする激しい攻撃が近代的銀行制度の先駆であったことを述べている。これに続く第101全紙の最初のページ（後述するように，MEGA では当初394ページだったとされているが，マルクスが書いたノンブルは393ページだったと思われる）は，それを受けて，「ここでチャイルドの著書のなかに見いだされるのとまったく同じように」，という書き出しで，17-18世紀における高利にたいする敵対について書かれている。このような，388ページ→389ページ，390ページ→391ページ，392ページ→393ページ，というすべての繋がりを通じて，一貫した文脈が読みとれるのである。

これに対して，最終のページづけによって入れ替えられた順序で――すなわち MEGA に収録されているままの状態で――これらのページを読もうとすると，[支払手段が高利の固有の地盤であること]→[高利にたいする反作用としての信用制度の発展]→[高利資本そのものについての歴史的記述]→[高利にたいする敵対から信用制度の創造へ]，という，きわめて不自然で理解しがたい叙述の流れになってしまう。おそらくエンゲルスも，最終のページ付けの状態で草稿を読んだときに，彼の第36章にそのままの順序で利用することを躊躇せざるをえなかったのであろう。彼は，

389-390ページを抜き出して，この章の末尾にもっていくという処理を行なったのである。これによって，[高利にたいする反作用としての信用制度の発展]→[高利にたいする敵対から信用制度の創造へ] という繋がりは確保されたけれども，一つには，[支払手段が高利の固有の地盤であること] から一挙に [高利にたいする反作用としての信用制度の発展] に話が移ることが避けられず，また一つには，章末に置かれた [高利資本そのものについての歴史的記述] がこの部分全体の記述の流れから外されることにならざるをえなかった。

こうした記述の流れから判断すると，上のページの置き換えは内容的にはどのような必然性もなかったと言わざるをえない。それではなぜ置き換えられたのか。筆者は次のようなことだったのではないかと考える。すなわち，マルクスは，「6)」の執筆後に，誤って，書き終えられていた2枚の紙葉を入れ替えてしまったのだが，この入れ替えに気づかないまま，第99全紙の追加挿入ののちに「6)」の全体に新しい一連のノンブルを打ち，その後もこの誤りに気づくことがないままとなってしまった，ということである。この入れ替えは実はきわめて簡単に生じうる。第101全紙を二つ折りにし，それでできた四つのページにそれぞれ389，390，391，392というノンブルをつける。ノンブルがこの状態のまま，二つ折りを裏返しに折り返すと，こんどは391，392，389，390という順序の状態が生じることになる。つまり，マルクスは不注意から第101全紙を反対に折り返してしまったために，このような置き換えが生じてしまったのであった。

さて，第101全紙に続く第102全紙のノンブルについては，MEGAの「異文目録」での編集者の記載によると，当初394，395，365aと書かれていたノンブルが402，403，404ページに変更されたということになるが，そうだとすると，第101全紙の当初の最後のページは392ページだったのだから，393ページが欠番となっていた――つまりマルクスがこの番号を飛ばしていた――ということになる。ひょっとすると，この番号の「飛び」が，MEGA編集者に草稿ページの最初の状態の――筆者が行なったよう

な――復元をためらわせたのかもしれない。しかし，MEGA 編集者のこの解読には疑問がある。

前稿（上）の215ページでの MEGA 異文注に記載されているように，第102全紙の１ページ目である，最終ページづけで402というノンブルをもつページの下半の末尾に，「2) 394ページの下部にあるこの注を見よ」，と書かれている。MEGA 編集者はこの異文注で，「マルクスは「403」を誤って「394」と書いた」として，「394」を「403」に訂正している。たしかに，MEGA 編集者の解読に従うとこのページは394ページなのだから，「394ページの下部にあるこの注を見よ」というのは誤記以外ではありえないことになる。しかし，指示されている注の書かれているページは，当該のページの次のページである，最終ページづけで403ページというノンブルをもつページの下部であり，マルクスが「394ページ」ということで考えていたのがこのページであることは確実である。この指示について筆者は，前稿（上）の筆者注264に次のように記しておいた。

> 「この異文注で MEGA 編集部は「394ページ」というマルクスの指示を単純に「403ページ」の誤記としているが，これはたんなる「誤記」ではなく，マルクスがこのページを書くときには，のちの403ページは実際に394ページであった可能性が大きい。しかも，この「394」という数字の前後には非常に大きい空きがあって，この数字自体が，あとから書き込む予定で作ってあった空白に実際にあとから書き込んだものであることを示唆している。以上のところから推定されるのは，この脚注を書いたときには，まだ次ページのページ番号がどうなるかが確定しておらず，のちに次ページがいったん394ページとされてこのページ番号が書かれたが，さらにそののちにそれがさらに403ページに修正された，という経緯である。」（前稿（上），215ページ。）

このように見ることができるとした場合，マルクスが「この脚注を書いたときには，次ページのページ番号がどうなるかが確定」していなかった

のは，またそうである以上，当然にこのページ自身のページ番号も確定していなかったのは，どのような事情によるものか，ということが問題となるが，これについて推定を許す手がかりはいまのところ見つけられないでいる。

それはともかく，上に引用した筆者注での推定が正しいとすると，最終ノンブルで403ページとなっているページは当初394ページだったのだから，その前の，最終ノンブルで402ページとなっているページ，つまり第102全紙の最初のページは当然に393ページであり，また最終ノンブルで404ページとなっているページは当初395ページであった可能性が大きいということになる。そうだとすると，第101全紙の最後が392ページで，これに第102全紙の393ページが続いていた，というわけで，「6)」には当初，385ページから395ページまで連続するノンブルがつけられていた，ということになる。筆者は，第102全紙の最後のブランクページでは395b→405というノンブル変更が行なわれたと見たが，その前のページが，MEGA編集者の見るように395a→404というノンブル変更が行なわれたのだとすると，この後の方のページでは，395→395a→404というノンブル変更が行なわれたということになる。

以上，マルクスが誤って全紙を反対に折り返したために生じたページの入れ替えを確認し，そのうえで，マルクスの最終のページづけにもかかわらず，この入れ替えをもとに戻して草稿ページの当初の順序を復元することが必要であることを述べた。

以下では，上のように復元された状態での「6)」について述べる。

(4) 第3部第5章のなかでの「6)」の位置

すでに繰り返して述べたように，「第5章　利子と企業利得（産業利潤または商業利潤）とへの利潤の分裂。利子生み資本」は，次の六つの節からなっている。

1) 〔草稿には表題なし。エンゲルス版第21章表題：利子生み資本〕

2) 利潤の分割。利子率。利子の自然率

3) 〔草稿では4)と誤記。表題なし。エンゲルス版第23章表題：利子と企業者利得〕

4) 〔草稿では5)と誤記〕利子生み資本の形態における剰余価値および資本関係一般の外面化

5) 信用。架空資本

6) 前ブルジョア的諸関係〔Vorbürgerliches〕

以上の六つの節は，大きく，二つの部分に分けることができる。すなわち，1)から5)までの五つの節と6)との二つである。1)から5)まででは，主体としての生産的資本（直接的には産業資本と商業資本であるが，本源的には産業資本である）にとっての前提であると同時に，また生産的資本の運動の結果としてたえず生みだされるそれの産物としての，生産的資本に包摂された利子生み資本を分析しているのにたいして，6)では，生成しつつある生産的資本が，眼前に見いだした大洪水前期的な形態における利子生み資本を，どのようにして自己のうちに包摂し，自己の形態（派生的形態）としていくのか，そしてそのようにして生産的資本に包摂された利子生み資本の運動は，生産的資本そのもの止揚にとってどのような歴史的意義をもつことになるのか，ということを叙述している。前者では，資本主義的生産とそのもとで完成した利子生み資本とを前提して，それ自体を資本主義的生産そのものの一形態として考察するのにたいして，後者では，そのような利子生み資本が成立する歴史的な過程と，成立した利子生み資本が資本主義的生産の歴史的な発展傾向にとってもつ意義とを考察するのである。

言うまでもなく，このような意味での両者の関係は，『資本論』第1部のうちでの第23章までの展開と第24章（いわゆる本源的蓄積）での叙述との関係，第3部エンゲルス版第4篇のうちの第16～19章と第20章（商人資本に関する歴史的なこと）との関係，同じく第6篇のうちの第37～46章と

第47章（資本主義的地代の生成）との関係と基本的に同一である。

平易に言えば，あるものを知る，認識するということは，当然に，それがどのようにして生成したのか，さらにそれが必然的にどのような別のものに転化せざるをえないか，ということをも知ること，理解することを含むのであって，資本を解明する叙述は，当然に，資本の歴史的生成についての叙述をも，資本の発展の結果としての資本の止揚についての叙述をも含まなければならない。この意味で，第1部第24章（いわゆる本源的蓄積）は――その「第7節　資本主義的蓄積の歴史的傾向」をも含めて――，『資本論』の不可欠の構成部分をなすものである。しかし，これらのことを知るためには，まずもって，そのものがなんであるのか，それが，一つの自立的な主体として，自己の諸前提をどのようにして自己の結果としてたえず生みだすことによって存続し自己を再生産しているのか，ということを把握しておかなければならない[4]。これが，第24章にたいして，第1部の第23章までの展開がもつ意味である。

商業資本についても利子生み資本についても近代的土地所有についても，それらを知るということには，それらが歴史的にどのようにして成立したか，ということを知ることが含まれているはずである。ただし，資本の二次的形態である商業資本も，資本の派生的形態である利子生み資本も，資本に従属させられた土地所有も，資本そのもの（資本一般）の場合とは異なり，自立した主体としての資本の運動によって包摂されたものであり，それによって規定された諸形態である。だからこれらの場合には，それら自身がどのようにして自己の諸前提を自己の結果として生みだすことによって自己を再生産しているのか，という，それらの主体としての運

4)　マルクスは「経済学批判」への「序説」のなかの「経済学の方法」で次のように書いている。「人間の解剖は，猿の解剖のための一つの鍵である。これにたいして，もろもろのより低級な動物種類のなかにある，より高級なものへのもろもろの予兆〔Andeutungen〕は，このより高級なもの自体がすでに知られている場合にだけ，理解することができる。こうして，ブルジョア経済は古代その他の経済への鍵を提供するのである。」(MEGA, II/1.1, S. 40.)

動は問題にならない。しかしここでも，歴史的に生成しつつある生産的資本が，目の前に見いだした商人資本，高利資本，先資本主義的土地所有をどのようにして包摂し，それらを従属させ，自己の諸形態に転形するのか，ということを叙述するまえに，商業資本も，利子生み資本も，近代的土地所有も，まずもって，資本に包摂された形態において資本の諸形態ないしそれが生みだした形態として展開され，理解されていなければならない。このような意味で，第3部のエンゲルス版ではそれぞれ独立の章とされた「第20章　商人資本に関する歴史的なこと」，「第36章　前資本主義的諸関係」，「第47章　資本主義的地代の生成」の三つの章は，以上のような意味でそれぞれ独自の重要な意味をもっているのである。

マルクスの草稿のうちから，エンゲルスがこれらの章に利用したそれぞれの部分を見たとき，第36章に使われた，本稿で見ている「6)前ブルジョア的諸関係」については，この部分が歴史的過程の叙述であることに異議を唱える人はいないであろう。これにたいして，第20章に使われた部分では，マルクス自身は節番号を書いただけでなんの見出しもつけておらず，第47章に使われた部分の場合には，この部分の前後との区切りさえも書かれていない。したがって，それらの部分がそれぞれ他の部分から区別される歴史的考察として独自の性格をもつ部分となっていることは，それらの部分での叙述の内容から読み取るほかはないのであるが，筆者は，これらの部分をそれぞれ独立の章として各篇の末尾においたエンゲルスの編集は適切であったと考える。

ここで，以上に述べたことにかかわるマルクス自身の文章をいくつか見て，歴史的過程についての叙述がそれ以外の部分にたいしてもつ意味と独自性とを確認し，それによってここで見ている「6)前ブルジョア的諸関係」が第5章全体のなかで占める位置を確かめておこう。

マルクスは『資本論』第1部第4章で「貨幣の資本への転化」を取り上げる。ここでは，すでに生成し終えている資本主義的生産様式のなかで日々行なわれている，貨幣の資本への転化，つまり資本の生成が分析の対

象である。だからここでは，資本主義的生産そのものの歴史的生成もこの生成のための諸条件の成立も，与えられた事実として前提し，それ自体は考察されない。言うまでもなく，それの考察が「第24章　いわゆる本源的蓄積」で行なわれることになる。第4章でマルクスは次のように書いている。

「貨幣が資本に転化するためには，貨幣の持ち手が自由な労働者を商品市場で目の前に見なければならない。……

労働市場を商品市場の一つの特殊的部門として目の前に見ている貨幣の持ち手は，この自由な労働者が流通部面で自分の前に立ち現われるのはなぜか，という問題には関心をもたない。そして同様にわれわれもしばらくはこの問題に関心をもたない。事実にしがみつくという，貨幣の持ち手が実践的にやっていることを，われわれは理論的にやるのである。とはいえ，一つのことは明らかである。自然が，一方の側に貨幣または商品の持ち手を生みだし，他方の側に自分の労働力しかもたない持ち手を生みだすことはない。この関係は自然史的な関係ではないし，また，歴史上のあらゆる時代に共通であるような社会的関係でもない。それは明らかに，それ自体が，先行した歴史的発展の結果であり，多くの経済的変革の産物，社会的生産の多数の古い構成体〔Formation〕の没落の産物なのである。」(MEW, Bd.23, S.183; MEGA, II/5, S.120-122. 強調は初版でのもの。なお，以下，原文中の強調は下線で，筆者の強調は傍点で示す。)

マルクスはすでに「経済学批判要綱」および「経済学批判。原初稿」のなかで，「資本一般」の内部で，「理論的に事実にしがみついて」資本を概念的に把握したのちに，資本の生成に「先行した歴史的発展」を考察することの意味についてあちこちで立ち入って述べており，それらはいずれも『資本論』での理論的展開と歴史的考察との関係を考える上で示唆するところが多い。それらのもののなかから，「要綱」および「原初稿」から一つずつ掲げて見ておこう。

まず，「経済学批判要綱」からのもの。

「資本にもとづいている生産がいったん前提されれば，……資本家が自己を資本として措定するための条件，すなわち彼は自己の労働によって，そうでなければなにか他のやりかたで――ただし既存の過去の賃労働によってではなく――つくりだされた諸価値を流通に持ち込まなければならない，という条件は，資本の大洪水以前的な諸条件に，資本の歴史的諸前提に属することになる。これらの条件・前提は，まさにそのような歴史的諸前提として過去のものであり，それゆえまた資本の形成史に属するものであって，けっして資本の同時代史に属するものではない，すなわち，資本によって支配されている生産様式の現実のシステムに入れるべきものではないのである。たとえば，農奴の都市への逃亡は，都市制度の歴史的諸条件・諸前提の一つであるが，それは発達した都市制度の現実にとっての条件，契機ではないのであって，現にある都市制度のなかでは止揚されている，それの過去の諸前提，それの生成の諸前提に属するものである。資本の生成，成立の諸条件および諸前提が想定するのは，まさに，資本がまだ存在せず，ようやく生成しつつある，ということである。だからそれら諸条件・諸前提は，現実的資本の出現とともに，すなわち自己の現実性から出発して，自己の実現の諸条件を自ら措定する資本の出現とともに消失するのである。だからたとえば，貨幣すなわち対自的に存在する価値が資本に本源的に生成するときには，資本家の側に蓄積――彼はこれを，自己の労働によってつくりだされた生産物および価値の節約によるにせよ，その他によるにせよ，非資本家として成し遂げたのである――が前提されているのにたいして，つまり，貨幣の資本への生成の諸前提は，資本の成立にとっての所与の外的諸前提として現われるのにたいして，資本は，それが資本として生成してしまえば，自己自身の諸前提を，つまり交換なしに新価値を創造するための実在的諸条件の占有を――自己自身の生産過程によって――つくりだ

す。本源的には資本の生成の諸条件として現われたこれらの前提が——それゆえまた資本の資本としての行動からは生じようがなかった諸前提——が，いまや，資本自身の実現の，現実性の諸成果として，資本によって措定されたものとして——資本成立の諸条件としてではなくて資本の定在の諸成果として——現われるのである。資本はもはや，生成していくためにもろもろの前提から出発するのではない。そうではなく，資本自身が前提されているのであって，資本は，自己自身から出発して，自己の維持および増大の諸前提そのものをつくりだすのである。それゆえ，剰余資本Ⅰ〔すなわち，貨幣が資本に転化して始めて取得した剰余価値が資本に転化されることによって形成された資本——引用者〕の創造に先行した諸条件，言い換えれば資本の生成を表現する諸条件は，資本が前提となっている生産様式の圏域に属するのではなくて，資本生成の歴史的先行段階として資本の背後にある。それはちょうど，地球が，どろどろの火と蒸気の海からその今日の形態へと移行してきたときに通過した諸過程が，完成した地球としての地球の生活の彼方にある，というのと同然である。言い換えると，たとえば個々の資本はいまなお蓄蔵〔hoarding〕によって成立しうるが，しかし蓄蔵貨幣〔hoard〕は，労働の搾取によって，はじめて資本に転化されるのである。……われわれの方法は，歴史的考察がはいってこなければならない諸地点を，言い換えれば，生産過程のたんに歴史的な姿態にすぎないブルジョア経済が自己を越えてそれ以前の歴史的な生産諸様式を指し示すにいたる諸地点を，示している。だから，ブルジョア経済の諸法則を展開するためには，生産諸関係の現実の歴史を記述する必要はない。とはいえ，この生産諸関係を，それ自体歴史的に生成した諸関係として正しく観察し演繹するならば，それはつねに，このシステムの背後にある過去を指し示すような，最初の諸方程式——例えてみれば自然科学における経験的諸数値のようなもの——に到達するのである。とすれば，これらの示唆は，現在あ

るものを正しく把握することとあいまって，過去の理解――これは一つの独立した仕事であって，これにもいずれは取り組みたいものだが――への鍵をも提供してくれる。同様にしてこの正しい考察は，他方で，生産諸関係の現在の姿態の止揚――それゆえ未来の予示，生成していく運動――が示唆されるにいたる諸地点に到達する。一方では前ブルジョア的諸段階が，たんに歴史的な，すなわちすでに止揚された諸前提として現われ，他方では今日の生産諸条件が，自己自身を止揚する諸条件として，それゆえまた，新たな社会状態のための歴史的な諸前提を措定する諸条件として現われるのである。」(MEGA, II/1.2, S.367-368.)

マルクスは，「ブルジョア経済の諸法則を展開するためには，生産諸関係の現実の歴史を記述する必要はない」と言う。なぜなら，資本の分析とは，まずもって「資本が前提となっている生産様式の圏域」に属する，だから「資本の同時代史〔contemporäre Geschichte〕」に属するところの，「資本によって支配されている生産様式の現実のシステム」の分析なのだからである。ここでは，「資本自身が前提されて」おり，すでに生成した「現実的資本」すなわち「自己の現実性から出発して，自己の実現の諸条件を自ら措定する資本」について，それがどのようにして「自己自身から出発して，自己の維持および増大の諸前提そのものをつくりだしていく」のか，つまり「自己自身の諸前提をつくりだしていく」のか，という過程が追跡されなければならないのである。

これにたいして，「資本の生成，成立の諸条件および諸前提」，「資本の生成を表現する諸条件」，すなわち「本源的に資本の生成の諸条件として現われた――それゆえまた資本の資本としての行動からは生じようがなかった――諸前提」は，「資本生成の歴史的先行段階として資本の背後にある」のであって，「資本の大洪水以前的な諸条件に，資本の歴史的諸前提に属する」のであり，「資本の形成史に属する」ものである。だから，「ブルジョア経済の諸法則を展開する」さいには，こうした「資本の形成

史」はひとまず度外視されなければならない。

ところが,「資本によって支配されている生産様式の現実のシステム」の分析を進めていくなかで,「この生産諸関係を,それ自体歴史的に生成した諸関係として正しく観察し演繹するならば,それはつねに,このシステムの背後にある過去を指し示すような,最初の諸方程式——例えてみれば自然科学における経験的諸数値のようなもの——に到達する」ことになる。なぜなら,「われわれの方法は,歴史的考察がはいってこなければならない諸地点を,言い換えれば,生産過程のたんに歴史的な姿態にすぎないブルジョア経済が自己を越えてそれ以前の歴史的な生産諸様式を指し示すにいたる諸地点を,示している」からである。ここで「方法」と言われているものは,言うまでもなく「経済学批判」の展開・叙述の方法であり,「経済学の方法」であって,より具体的には資本の展開・叙述の方法である。この方法による「資本」の展開・叙述そのもののなかで,「生産過程のたんに歴史的な姿態にすぎないブルジョア経済が,自己を越えて,それ以前の歴史的な生産諸様式を指し示すにいたる」のであり,そのような「諸地点」で「歴史的考察がはいってこなければならない」。こうして,到達した「最初の諸方程式」による「システムの背後にある過去」の「示唆は,現在あるものを正しく把握することとあいまって,過去の理解への鍵をも提供してくれる」のである。

しかし,このような「諸地点」で指し示されるのは,「それ以前の歴史的な生産諸様式」だけではない。「同様にしてこの正しい考察は,他方で,生産諸関係の現在の姿態の止揚——それゆえ未来の予示,生成していく運動——が示唆されるにいたる諸地点に到達する」ことになる。

こうして,資本主義的生産様式のもとでの「生産諸関係を,それ自体歴史的に生成した諸関係として正しく観察し演繹する」ことによって到達する「諸地点」では,「一方では前ブルジョア的諸段階が,たんに歴史的な,すなわちすでに止揚された諸前提として現われ,他方では今日の生産諸条件が,自己自身を止揚する諸条件として,それゆえまた,新たな社会状態

のための歴史的な諸前提を措定する諸条件として現われる」のである。

以上のところからわれわれは，『資本論』第1部での第23章までの叙述にたいする第24章での叙述の位置と意義とを，マルクスの言う「われわれの方法」に即してよく理解することができる。

もう一つ，「経済学批判　原初稿」からのものを見ておこう。マルクスは，さきに見た『資本論』第1部での「貨幣の資本への転化」からの引用で言われているのとほとんど同じことを次のように書く。

> 「貨幣の持ち手――あるいは，いまのところわれわれにとって貨幣の持ち手とは，経済的過程それ自体のなかでは，ただ貨幣の人格化にすぎないのだから，貨幣と言い換えてもよい――が労働能力を商品として市場で，流通の諸限界のなかで見いだせること，こうした前提からわれわれはここでは出発するのであり，こうした前提からブルジョア社会の生産過程は出発するのであるが，この前提は，明らかに，一つの長い歴史的発展の結果であり，多くの経済的変革の総括〔Resumé〕であり，他のもろもろの生産様式（もろもろの社会的生産関係）と社会的労働の生産諸力のなんらかの程度の発展とが没落することを前提している。こうした前提のうちに与えられている，過ぎ去った特定の歴史的過程には，この関係をさらに詳しく考察するところで，もっとはっきりとした定式が与えられるであろう。とはいえ，経済的生産がこのような歴史的発展段階にあること――自由な労働者がすでにこのことの産物そのものなのであるが――が，資本そのものが生成してくるための前提であり，だからなおさら資本そのものが定在するための前提なのである。資本の存在は，社会の経済的な姿態形成〔Gestaltung〕の長期にわたる歴史的過程の結果である。」(MEGA, II/2, S.91.)

このなかで「この関係をさらに詳しく考察するところ」ということで考えられているのが「本源的蓄積」の箇所であることは言うまでもない。これにすぐ続けて，マルクスは次のように書く。

「弁証法的形態で叙述することは，自己の諸限界をわきまえている場合にのみ正しいのだということが，この地点ではっきりと分かる。われわれにとっては資本の一般的概念がもたらされるのは単純流通の考察からである。なぜならば，ブルジョア的生産様式の内部では，単純流通そのものが，資本の前提であるとともに資本を前提しているものとして以外には，存在しないからである。資本が単純流通から生じると言ったからといっても，資本がある永遠の理念の化体になるわけではない。資本が単純流通から生じるということが示しているのは，資本とは，交換価値を定立する労働，交換価値に立脚する生産がそこに行きつかざるをえない必然的形態にほかならないということ，また資本は現実にまずもってそういうものとしてあるのだということである。」(Ebenda.)

ここでマルクスが「弁証法的形態で叙述すること」と言うことで念頭に置いているのは，すぐあとのところで述べていることから分かるように，「単純流通の考察」から「貨幣の資本への転化」を通じて「資本の一般的概念」に到達するという叙述の歩みのことである。このなかで，観察者としての「われわれにとって〔für uns〕」，単純流通の考察から資本の一般的概念がもたらされることになるのであって，これを「資本が単純流通から生じる」と表現することができるが，このことはけっして，「社会の経済的な姿態形成の長期にわたる歴史的過程の結果」として資本が生成する過程を明らかにするものではなく，「資本とは，交換価値を定立する労働，交換価値に立脚する生産がそこに行きつかざるをえない必然的形態にほかならないということ，また資本は現実にまずもってそういうものとしてあるのだということ」を示すにとどまる。だから，資本の歴史的生成の過程の叙述は，「弁証法的形態での叙述」の「諸限界」の外部にあるのであり，「弁証法的形態での叙述」はこうした「歴史的考察」によって補われなければならないのである。この「弁証法的形態での叙述」は，「歴史的考察」にたいするものとして「理論的展開」と呼ぶことができるであろう。

「経済学批判要綱」,「経済学批判。原初稿」での以上の記述によって見てきたのは，直接には，資本の「弁証法的形態での叙述」ないし理論的展開と，資本そのものの歴史的生成および歴史的止揚についての「歴史的考察」との区別および関連について述べられていることであったが，これらは,『資本論』第3部での商業資本，利子生み資本，地代の分析とそれらについてのそれぞれの「歴史的考察」との区別および関連の理解に決定的な視点を提供してくれる。すなわち，前者はいずれも,「資本によって支配されている生産様式の現実のシステム」の「弁証法的形態での叙述」であり，後者はいずれも，前者のなかで「生産過程のたんに歴史的な姿態にすぎないブルジョア経済が，自己を越えて，それ以前の歴史的な生産諸様式を指し示す」ような「諸地点」ではいってくる「歴史的考察」なのである。しかも，この「歴史的考察」について見逃されてならないのは，そこでは「前ブルジョア的諸段階が，たんに歴史的な，すなわちすでに止揚された諸前提として現われる」だけでなく，さらに,「今日の生産諸条件が，自己自身を止揚する諸条件として，それゆえまた，新たな社会状態のための歴史的な諸前提を措定する諸条件として現われる」のだ，ということである。

ここで一つ，注意しておきたいことがある。この「6)」は「歴史的考察」であるが，資本の本源的蓄積にかんする叙述でも，商業資本の歴史的考察でも，地代の歴史的考察でもそうであるように，利子生み資本の歴史的考察というのは，利子生み資本にかんする現実の歴史過程を仔細にわたって実証的に記述することではありえない。ここではすでに，資本一般についての理論的分析が前提されており，そのなかですでに把握されていた「資本の同時代史」，すなわち利子生み資本について言えば利子生み資本の理論的な発生史を武器として，それの前史を辿るのである。違いは，ここでは「資本によって支配されている生産様式の現実のシステム」のなかでの利子生み資本のたえざる発生史ではなくて，このシステム以前から存在した利子生み資本がこのシステムのなかにどのようにして組み込まれ，包

摂されるのかという意味での発生史を明らかにする，という点にある。後者は前者を前提し，後者は前者にもとづいて行なわれる。まさに，「もろもろのより低級な動物種類のなかにある，より高級なものへのもろもろの予兆は，このより高級なもの自体がすでに知られている場合にだけ，理解することができる」のであり，「こうして，ブルジョア経済は古代その他の経済への鍵を提供するのである。」(MEGA, II/1.1, S.40.) だから，さまざまの歴史的な偶然的事情，地理的・自然的事情から生じる膨大な特殊的な形態のなかから，産業資本が利子生み資本を自己のもとに包摂するにいたる歴史的過程の最も基本的な流れをつかみだして，それを叙述することになる。この基本的な流れから枝分かれする傍流やこの基本的な流れに合流してくるさまざまの源流は，必要なかぎりで触れられるだけである。ここに，『資本論』における歴史的考察と経済史についての実証的研究との決定的な違いがある。実証的諸研究がマルクスの叙述のなかにある具体的な事実についての誤りや不十分さを指摘することは，それ自体としては十分に意義のあることだとしても，それが歴史的過程の最も基本的な流れについてのマルクスの把握を否定するものでないかぎりは，それらの研究の成果も，経済史の領域でもちうるような意義をもつことはありえない[5)]。

---

5)　上の本文に引用した「経済学批判要綱」からの箇所は1858年1月に書かれたものである(ノート第4冊のなかに記載された日付 (MEGA, II/1.2, S. 333) による)。その次の「経済学批判。原初稿」は1858年8月-10月に執筆されたものである。両者の中間である1858年2月22日にマルクスはラサールに宛てて次のように書いた。

「全体は6部〔Buch〕に分けられている。1.資本について (二三の前章〔Vorchapter〕を含む)。2.土地所有について。3.賃労働について。4.国家について。5.国際貿易。6.世界市場。もちろん，ときどきは他の経済学者たちに批判的に言及することを避けるわけにはいかない。ことにリカードウにたいする論駁は，ブルジョアであるために，彼でさえ厳密に経済学的な観点からしても誤ちを犯すことを余儀なくされているかぎりで，避けられない。だが全体として，経済学および社会主義の批判と歴史は別の一著作〔Arbeit〕の対象をなすべきものだろう。最後に，経済的な諸範疇と諸関係との発展の簡単な歴史的素描〔historische Skizze〕が第3の著作〔Arbeit〕になる。」(MEW, Bd.29, S. 551.)

他方，同じ両者の中間である1858年6月に作成された「7冊のノートへの索引」でも，またのちに1859年春または1861年夏に書かれたと推定されている「資本にかんする章へのプラン草案」でも，「資本の生産過程」に「資本の本源的蓄積」を置くことが予定されていた。

なお，「弁証法的形態での叙述」の「諸限界」の外部にある「歴史的考察」は，たんなる「補足」にとどまらない。なぜなら，ここで始めて，「資本によって支配されている生産様式の現実のシステム」そのものの生成とそれの行方とが明らかにされ，それによってこのシステムの歴史的位置と意義とが最終的に明らかとなるのだからである。この意味では，そうした「歴史的考察」は同時に対象の考察を締め括るものでもある。マルクスは，第3部第6章で「地代を論じるべき諸項目」のプランを書き，その最後に「D)地代についての締め括りの諸考察〔Schlußbetrachtungen〕」という項目を置いたが，マルクスが――このプラン以前に書かれていたもののなかから――この項目のなかに含めるつもりだった草稿部分は，主としてエンゲルス版で「第47章　資本主義的地代の生成」に利用された部分だったと推測されるのであって，マルクスにとってこの第47章部分での地代に関する「歴史的考察」は，同時に地代に関する「締め括りの考察」でもあったのだと考えられる。これと同様の意味で，第1部第24章も，資本の生成過程の歴史的考察であると同時に，第1部での資本の考察を締め括るものと言うことができるであろう。第3部第5章での利子生み資本の考察でも，最後の「6)前ブルジョア的諸関係」は，利子生み資本についての

だから，上のラサール宛ての手紙のなかで言う第3の著作での「経済的な諸範疇と諸関係との発展の簡単な歴史的素描」が，「資本一般」のなかに含まれるべき「歴史的考察」としての「資本の本源的蓄積」の叙述とは別に書かれるはずのものだったわけである。なお，マルクスは1858年4月2日にエンゲルスに宛てて，「次に示すのが第1の部分〔the first part〕の簡単な梗概だ。代物の全体を6部に分けるつもりだ。すなわち，1.資本について。2.土地所有。3.賃労働。4.国家。5.国際貿易。6.世界市場」(MEW, Bd.29, S. 312)，と書いた。ここでは，ラサール宛ての手紙で，「別の一著作」および「第3の著作」から区別されていた最初の著作が，「第1の部分」と呼ばれており，これに続く「部分」(つまり「別の一著作」および「第3の著作」) を予定していたことが示唆されていた。著作『経済学批判』のこの3著作プランは，実際に執筆・刊行する著作の著述プランとしては，のちに『資本論』4部作プラン (1.資本の生産過程；2.資本の流通過程；3.総過程の諸形象化；4.経済学にかんする諸学説) に取って代わられた。

上で言う「経済的な諸範疇と諸関係との発展の簡単な歴史的素描」がどのようなものとなるはずだったのかを推定する手がかりはないが，「資本一般」ないし『資本論』のなかに含まれるべき歴史的考察の諸部分とははっきりと区別される性格のものであったことだけは確かであろう。

「歴史的考察」であると同時に利子生み資本についての「締め括りの考察」をなしているのである[6)]。

以上のところから明らかなように，第3部第1稿の第5章は，大別すれば，利子生み資本の理論的展開が行なわれている1)から5)までの五つの節と，利子生み資本についての歴史的考察が行なわれている6)という，はっきりと性格の異なる二つの部分からなるものと見なければならない。すなわち，

I　利子生み資本の理論的展開

II　利子生み資本にかんする歴史的考察

さらに，前者の五つの節は，これまでの拙稿のなかでいくたびか繰り返して述べたように，大きく，利子生み資本を概念的に把握する1)～4)の四つの節と，信用制度のもとでの利子生み資本（monied capital）を考察する5)とに分けることができるのだから，この区分を加えれば，第5章は次のような構成をもつものだということになる。

I　利子生み資本の理論的展開

---

6)　関口尚志氏が，第36章についての「原典解説」で，第3部第5篇のなかでのこの章の位置について書かれているので，参考までに掲げて筆者の理解と対照していただくことにしよう。

「第3部第5篇で利子生み資本論，信用論を展開したのち，その最終章でこのように歴史をさかのぼるのは，それによって近代的な利子生み資本や信用制度の本質を特殊歴史的な性格として深く浮彫りできるからにほかならない。すなわち，この章の課題は，第一に，近代の利子生み資本とは対照的な高利資本の蓄積様式や歴史的役割を検討し，第二には，利子生み資本の産業資本への従属（とりわけ信用制度の創設）として展開する近代利子生み資本の成立史を把握することに置かれているが，こうした二つの脈絡で歴史の契機にさかのぼることによって，近代的な利子生み資本や信用制度を歴史対照的・発生史的な深みから理解し，前章までの理論的展開をより広い視座で位置づけなおしつつ，第5篇を総括することがねらいとされているのである。」(『資本論体系』⑥「利子・信用」，有斐閣，1985年，191ページ。)

関口氏はまた，『資本論』第3部の第20章，第36章，第47章がそれぞれ第4篇，第5篇，第6篇のなかで占める位置については次のように書かれている。

「それらはいずれも，単なる歴史的余論にとどまるものではなく，近代ブルジョア的経済現象に関する一応の理論的解剖をふまえたうえで，あらためて歴史的（歴史対照的，発生史的）省察を加え，そうした歴史的奥行きのなかで各篇を総括する位置にあるものというべきであろう。」(同前，同ページ。)

(1) 利子生み資本の概念的把握

(2) 信用制度下の利子生み資本の考察

II 利子生み資本にかんする歴史的考察

このうちIを二つの部分に区分することの重要性を強調すれば，第5章は次の三つの部分からなると言うことも許されるであろう。

I 利子生み資本の概念的把握

II 信用制度下の利子生み資本の考察

III 利子生み資本にかんする歴史的考察

しかし，このように区分できるとしても，最後の歴史的考察の部分で対象とされているのは利子生み資本一般であって，産業資本が利子生み資本を自己に従属させるために創造した信用制度だけなのではない。「6)前ブルジョア的諸関係」は，その全体が「利子生み資本」を対象としている第5章の末尾にあって，その利子生み資本にかんする歴史的考察となっているのである。だから，「第3部第5篇は大別して第21章～第24章では利子生み資本についての一般的説明が与えられ，第25章以下では信用制度が論じられている」[7]とする第5章（エンゲルス版第5篇）の二大別説は，5)（第25章～第35章）で論じられているものを「信用制度」そのものとしている点で不適切であるだけでなく，第5章の対象たる「利子生み資本」についての歴史的考察であるという6)（エンゲルス版第36章）の独自の意義を見失わせることとなっている点でも不適切だと言わなければならない。

さて，以上，第3部第5章のなかで「6)前ブルジョア的諸関係」のもつ位置と意義とを見たので，本稿では以下，この6)で述べられていることのポ

7) 三宅義夫『マルクス信用論体系』，日本評論社，1970年，3-4ページ。氏は同書で，「この「先資本制的なるもの」は第4篇の「商人資本にかんする歴史的考察」，第6篇の「資本制地代の発生史」，また――これはやや関係が異なるが――第1部での「いわゆる本源的蓄積」，とあい並ぶ史的考察の章たるものである」（78ページ）と述べておられながら，同書のなかで繰り返して上のような「大別」を主張されている（15，18，26，285，295ページ）。氏が「この大別の点はその後ほぼ定説的となってきているように見受けられる」（4ページ）と書かれていたように，かつては氏のこの「大別」にそのまま従っている論者が多く見られたし，またいまでもそのような論者が散見される。

イントを拾って，見ておくことにしよう。なお，念のために付け加えておくが，ここでの課題は，マルクスの考えているところをできるかぎり正確に理解することである。歴史的事実についてのマルクスの理解や評価に不十分な点や訂正されるべき点もあるであろう。しかし，そのようなマルクス批判やマルクス訂正は，マルクスを正確に理解した上で，正確に理解されたマルクスについてなされるべきものである。

(5) 利子生み資本と高利資本

「6)前ブルジョア的諸関係」の冒頭でマルクスは，「利子生み資本，または――古風な形態における利子生み資本をそう呼んでもいいのだが――高利資本〔Das zinstragende Capital, oder wie wir es in seiner alterthümlichen Form bezeichnen können, das Wuchercapital〕」は，商業資本とともに，「資本主義的生産様式よりもずっと前からあって非常にさまざまな経済的社会構成体のなかに現われる，資本の大洪水以前的形態」に属する，と書き始めている（MEGA, II/4.2, S.646；前稿（上），171ページ)。見落とされてならないのは，ここでは，高利資本は古風な形態における利子生み資本なのであって，この形態において利子生み資本そのものが「資本の大洪水以前的形態」に属する，とされていることである。高利資本は，古風な形態にあるものだとしても，まぎれもなく利子生み資本なのである。『1861-1863年草稿』でマルクスは次のように書いている。

> 「この自立化は，以前に述べた諸理由は別としても，次の理由によってますます容易に固定する。というのは，利子生み資本は，歴史的形態としては産業資本以前に現われ，また産業資本と並んでその古い形態のままで存続し，そして産業資本によってその発展の過程ではじめて産業資本自身の一つの特殊的形態として資本主義的生産のもとに包摂されるのだからである。」(『1861-1863年草稿』，MEGA, II/3.4, S. 1493.)

高利資本は，言うまでもなく，「資本の大洪水前期的形態に属する」資本である。そしてこの「6)前ブルジョア的諸関係」では，この高利資本が産業資本によって自己に従属させられ，資本主義的生産の一形態とされていく歴史的過程が述べられている。しかし，マルクスは，高利資本と利子生み資本とを決定的に対立するものとして区別することをしてはいない。まずもって，このことをはっきりと確認しておくことが重要である。

マルクスは次のように書いている。

> 「資本主義的生産様式の本質的な一要素をなしているかぎりでの利子生み資本を，高利資本から区別するものは，けっしてこの資本そのものの性質または性格ではない。それは，ただ，この資本が機能する諸条件が変化したということだけであり，したがってまた貨幣の貸し手に相対する借り手の姿がまったく変わってしまったということだけである。」(MEGA, II/4.2, S.652；前稿（上），202ページ。)

ここでマルクスは，資本主義的生産様式における資本の派生的形態としての利子生み資本が前資本主義的諸生産様式における高利資本から区別されるのは，その「資本そのものの性質または性格」によるのではない，と言い，同じ資本が「機能する諸条件が変化」し，「借り手の姿がまったく変わってしまった」ということだけによって区別されるのだ，と言っている。言うまでもなく，資本主義的生産様式のもとで利子生み資本が機能するための最も基本的な諸条件とは，貸し出された資本が生産過程で剰余価値を取得するために前貸しされるということであり，ここでは借り手が生産的資本家となっていることである。このことだけが，資本主義的生産様式に包摂された利子生み資本を前資本主義的諸生産様式のもとでの高利資本から区別するのである。

上の引用に先行するパラグラフで，マルクスは次のように書いている。

> 「信用制度の発展は高利にたいする反作用として実現される」ということが「意味しているのは，利子生み資本が資本主義的生産様式の諸条件と諸要求とに従属するということ以上のなにものでもないし，

またそれ以下のなにものでもないのである。だいたいにおいて利子生み資本は近代的信用制度のもとでは資本主義的生産様式の諸条件に適合させられる。高利そのものは，存続するだけでなく，資本主義的生産様式の発達している諸国民のもとでは，すべての古い立法がそれに課していた制限から解放されるのである。利子生み資本は，資本主義的生産様式の意味では借入れがなされないような，またなされることができないような，諸個人や諸階級にたいしては，またはそのような事情のもとでは，高利資本として現われる（高利資本という形態しか取らない)。個人的な必要のために借りる場合（たとえば質屋)，浪費の目的で借りる場合（享楽的富のために)，または，生産者が資本家的生産者ではなくて，小農民，手工業者等々であり，したがってまだ直接生産者が自分自身の生産諸条件の所有者または占有者である場合，最後に，資本家的生産者自身がそうした小さな規模で仕事をしており，したがって，かの自営の勤労者によく似ている場合がそれである。」(MEGA, II/4.2, S.652；前稿（上)，201-202ページ。)

見られるように，利子生み資本が近代的信用制度のもとで資本主義的生産様式の諸条件に適合させられたのちにも，高利そのものはなくなるわけではなく，「すべての古い立法がそれに課していた制限から解放され」て存続するのであり，「利子生み資本は，資本主義的生産様式の意味では借入れがなされないような，またなされることができないような，諸個人や諸階級にたいしては，またはそのような事情のもとでは，高利資本として現われる」のであり，「高利資本という形態しか取らない」のである。マルクスはまた，「資本の生産様式のない資本の搾取」という「関係は，ブルジョア経済のなかでも，遅れた産業部門や近代的生産様式への移行に逆らう産業部門で再現する」と言い（MEGA, II/4.2, S. 650；前稿（上)，184ページ)，前資本主義的諸生産様式のもとでの利子生み資本の特徴的な形態である，浪費者への高利貸付と小生産者への高利貸付とについて，これらの形態は資本主義的生産様式の「性格を規定することはなくなってい

る」が，しかし「同じこれらの形態は資本主義的生産様式の土台の上でも再現する」と言っている（MEGA, II/4.2, S.647；前稿（上），174ページ）[8]。

つまり，資本主義的生産様式のもとでも，まだ資本主義的生産に包摂されていない産業部門があるかぎり，そこでは，貸し出された資本は剰余価値を生産するように前貸しされず，借り手が生産的資本家ではなく，独立の生産者であることがありうるのであって，この場合には，資本主義的生産様式のもとでではあっても，利子生み資本の形態としては高利資本と区別されることはないのである。

また，マルクスは終りに近いところで次のようにも言っている。

「商人資本と利子生み資本とは資本の最も古い形態である。しかし，普通の観念では利子生み資本がとりわけすぐれた意味での資本〔Capital κατ' ἐξοχήν〕の形態として現われるということは，当然のことである。なぜならば，商人資本の場合には，ある媒介的活動があるのであって，それが詐欺と解釈されようと労働その他なんと解釈されようと，とにかくそういう活動が行なわれるのだからである。これに反して，利子生み資本では，資本の自己再生産的性格，自己増殖する価値，剰余価値生産が，神秘的な〔occult〕質として純粋に現わ

8) マルクスは「経済学批判要綱」で次のように書いている。

「こうした関係がブルジョア経済の内部で繰り返されているところと言えば，それは遅れた産業部門，言い換えれば近代的生産様式のなかでなんとか没落に抗している産業部門である。これらの部門では，資本と労働との関係がなんらかの，新たな生産諸力の発展の土台をも，新たな歴史的諸形態の萌芽をも，内包することのないままにいまだに陰険きわまりない労働搾取が行なわれている。生産様式そのものにおいては，資本はここではまだ――手工業的経営においてであれ小規模農業においてであれ――，個々の労働者または労働者家族のもとに素材的に包摂されたものとして現われている。資本の生産様式がないのに，資本による搾取が行なわれているのである。利子率は，利潤を，また労賃の一部でさえをも包含しているがゆえに，非常に高いものとして現われる。資本が生産をわがものとしておらず，したがってただ形態的に資本であるにすぎないこの高利の形態は，前ブルジョア的な生産諸形態が支配的であることを前提するが，しかし副次的な諸領域では，ブルジョア経済そのものの内部でふたたび再生産される。」（「経済学批判要綱」，MEGA, II/1.2, S.716-717.）

この箇所は，若干の手を加えて『1861-1863年草稿』に取り入れられた（MEGA, II/3.4, S. 1546）。

れている。それだからこそ，一部の経済学者でさえもが，ことに産業資本がまだ十分には発展していない諸国，たとえばフランスなどでは，利子生み資本を資本の基本形態として固執し，また，たとえば地代を，その場合にも貸付という形態が優勢だという理由で，ただ利子生み資本の別の形態としか考えないということにもなるのである。こうして，資本主義的生産様式の内的編制はまったく見損われ，また，土地も，資本とまったく同様に，ただ資本家に貸し付けられるだけだということはまったく見落とされてしまう。……決定的なことは，ここでもまた，それらが直接生産者に貸し付けられるか，それとも産業資本家に貸し付けられるか，ということである。前のほうの場合は，少なくともこの貸付が行なわれる部面では，資本主義的生産様式の非存在を前提しているのであり，あとのほうの場合が資本主義的生産様式の土台の上での前提なのである。」(MEGA, II/4.2, S.663；前稿(上)，229-230ページ。)

資本主義的生産様式に包摂された利子生み資本であれ，前資本主義的諸生産様式のもとでの高利資本であれ，「利子生み資本では，資本の自己再生産的性格，自己増殖する価値，剰余価値生産が，神秘的な〔occult〕質として純粋に現われている」のであって，それゆえに，「普通の観念では利子生み資本がとりわけすぐれた意味での資本の形態として現われる」。しかし，「決定的なことは，ここでもまた，それらが直接生産者に貸し付けられるか，それとも産業資本家に貸し付けられるか，ということである」。そして，「あとのほうの場合が資本主義的生産様式の土台の上での前提なのである」。

以上は，資本主義的生産様式のもとでも「高利資本」の形態を取る利子生み資本が残存することを見たのであるが，他方，前資本主義的諸生産様式のもとでの高利資本についても，浪費者への貨幣貸付および小生産者への貨幣貸付という高利資本の特徴的な存在形態とは異なる高利資本の存在形態があったことを見逃してはならない。

マルクスは，「6)」の冒頭で，利子生み資本と商業資本とが「資本の大洪水以前的形態に属する」ものであることを述べたのちに，「高利資本の発展は，商人資本の発展に（またことに貨幣取扱資本の発展に）つながっている」と言い，そのような状況のもとでは，商人資本および貨幣取扱資本にたいする貨幣貸付が行なわれたことを示唆したうえで，「商人が貨幣を借りるのは，貨幣を用いて利潤をあげるためであり，それを資本として充用する（支出する）ためである」としたうえで，これについて，「だから，初期の諸形態のもとで商人に貨幣の貸し手[9)]が対立するのも，近代的資本家に彼が対立するのとまったく同じである」とさえ書いている。それに続けて，「奴隷経済が致富の手段として存在しており，貨幣が（奴隷や土地などの購入によって）他人の労働を取得するための手段であるような，すべての形態のなかでは，貨幣は，それをこのように投下することができるからこそ，資本として増殖できるものとなり，利子を生むものとなる」と言う。

高利資本がこのような借り手に貨幣貸付を行なったことを確認したうえではじめてマルクスは，「とはいえ，資本主義的生産様式以前の時代に高利資本が存在するさいの特徴的な形態には二つものがある」と言って，高利資本の特徴的な存在形態に話を移していくのである。

こうした「特徴的な形態」とは区別される形態における貸し手と借り手との関係が「近代的資本家に彼が対立するのとまったく同じである」からと言って，ここでの利子生み資本を資本主義的生産様式のもとにおける利子生み資本と同一視することができないことは言うまでもないことである。「特徴的」ではないにせよ，これもまたまぎれもなく，「利子生み資本の古風な形態」である高利資本の存在形態である。ただそれが，「特徴的な形態」でないので，高利資本についてのこれ以降の叙述ではもはや触れられることがないままに終わるのである。

---

9) 原語は Geldverleiher である。前稿（上）では，岡崎訳に従って「金貸業者」としておいたが，もっと一般的に「貨幣の貸し手」と訳すべきだと考え，訳語を変更した。

このように，前資本主義的諸生産様式のもとでの高利資本の存在形態は，浪費者への貨幣貸付および小生産者への貨幣貸付という特徴的な形態だけではないのだということも忘れられてはならない。

前資本主義的諸生産様式のもとでの高利資本および商人資本を一括りにして「前期的資本[10]」と呼び，これを資本主義的生産様式に包摂された利子生み資本および商業資本から「範疇的に峻別する」とすれば，それは，以上のところから読みとれるマルクスの理解とは基本的なところで対立することになるであろう。というのも，「範疇的に峻別する」というのは，「資本そのものの性質または性格」によってそれらを区別する，ということを意味するほかはないものと考えられるのだからである[11]。

なお，「……貨幣の貸し手に相対する借り手の姿がまったく変わってしまったということだけである」，というさきの引用に続けて，マルクスは次のように書いている。

> 「財産もない男が，産業家としてであろうと商人としてであろうと，信用を受ける場合でさえも，それは，彼が資本家として機能し，借りた資本で不払労働を取得するであろうということが信頼されて行なわれるのである。彼に信用が与えられるのは，潜在的な資本家〔Capitalist in posse〕としての彼に与えられるのである。そして，経済学

10) 大塚久雄氏は，「前期的資本」という「範疇」を立てる意味について，「資本主義以前の資本諸形態を「前期的資本」die vorsintflutliche Kategorie des Kapitals として，資本主義社会の構成要因としてのそれと範疇的に峻別しつつ，その歴史的に独自な運動法則を経済＝社会学的に確定する」ことだと説明されている（『大塚久雄著作集』第3巻，岩波書店，1969年，10ページ）。この説明から明らかになるのは氏における「前期的」という語は「大洪水以前的〔vorsintflutlich〕」という意味をもつものだったのだということである。大塚氏の「前期的資本」についての諸研究はきわめて示唆するところの多いものであって，筆者はそれらからきわめて多くのものを学んできたが，それにもかかわらず，前資本主義的諸生産様式のもとでの利子生み資本および商業資本を「前期的資本」として一括りにして，資本主義的生産様式のもとでの利子生み資本および商業資本と「範疇的に」区別することには同意できない。

11) だから，第36章の「原典解説」で関口尚志氏が，「高利資本は近代的な利子生み資本とは範疇を異にしている」（『資本論体系』⑥「利子・信用」，有斐閣，1985年，193ページ）と書かれているのは，マルクスの「解説」としては適切であるとは言えないであろう。

的弁護論者たちによって非常に賛嘆されるこの事情，すなわち，財産はないが精力も能力も堅実さも事業知識等々もある一人の男がこのようにして資本家に転化することができる――いったいに資本主義的生産様式のもとでは各人の商業価値が正しく評価されるものなのである――というこの事情は，既存の個別的資本家たちにたいしてはたえずありがたくない数の新たな射幸騎士を戦場に連れ出すものだとはいえ，資本による支配そのものを強固にし，この支配の基礎を拡大して，それが社会の下層からの新鮮な力によってたえず補充されることを可能にするのである。それは，ちょうど，中世のカトリック教会が身分や素性や財産を問題にしないで人民のなかの最良の頭脳で構成されていたという事情が，教階制と俗人抑圧とを強固にするための主要な手段だったようなものである。下層諸階級〔classes inférieures〕の最もすぐれた人物を自分のなかに吸収する能力が支配階級にあればあるほど，その支配はますます強固でますます危険なのである。」(MEGA, II/4.2, S. 653；前稿（上），202-203ページ。)

マルクスのこの文章は，次の二つの点から見て注目すべきものである。

第1に，「財産もない男が，産業家としてであろうと商人としてであろうと，信用を受ける場合でさえも，それは，彼が資本家として機能し，借りた資本で不払労働を取得するであろうということが信頼されて行なわれる」のであって，「彼に信用が与えられるのは，潜在的な資本家としての彼に」たいしてだ，ということである。資本家は資本の人格化，資本の代表者である。これまで資本家であったこともなく現に資本家ではない誰であろうと，彼がなんらかの仕方で入手したある額の貨幣を生産過程に前貸して剰余価値を取得するときには，その貨幣は資本として機能し，資本に転化したのであり，それを機能させた彼は，この間，この資本の人格化，代表者，すなわち資本家であった。かりに，その貨幣が貨幣資本家――利子生み資本の人格化――から借り受けたものであって，生産過程の完了ののちにただちに利子とともに貸し付けられた全額が返済されたとしても，

借り手は，その貨幣を生産過程で資本として機能させているあいだは正真正銘の資本家である。

マルクスは第3部第5章の冒頭，すなわち利子生み資本の分析の最初のところで，「自分の手中に100ポンド・スターリングの可能的資本をもっている」人が，「この100ポンドを，現実にそれを資本として充用する別の人の手に1年間任せておく」という状況を想定し，この場合には「前者は後者に20ポンドの利潤を生産する力，つまり自分にとって費用もかからなければ自分が等価を支払いもしない剰余価値を生産する力を与えることになる」のであって，「後者が100ポンドの所有者に年末に5ポンドを支払うとすれば，すなわち生産された利潤の一部分を支払うとすれば，これによって彼はこの100ポンドがもっている使用価値に，つまり資本として機能するという，だからまた20ポンドの利潤を生産するという，その使用価値に，支払うわけである」，と述べて，貨幣が資本として商品となることを説明している[12]。ここでの「現実にそれを資本として充用する別の人」の場合も，彼がすでに資本家として機能してきていなければならないわけではない。「潜在的な資本家」としての「財産もない男」であってもいいのである。〈ここでの借り手が，すでに産業資本家または商業資本家として自己の資本を機能させていなければならず，借り入れた貨幣はそれに追加される追加資本でなければならないはずなのに，マルクスはこうした現実の関係に無頓着だ〉とマルクスを非難する人は，ここでの貸し手と借り手とのあいだの取引が，発展した銀行制度のもとでの monied Capital という利子生み資本の具体的な形態から抽象されたものであり，またそのように抽象してきたものでなければならない，ということを理解できないだけでなく，資本家というはおよそ資本の人格化，代表者でしかないのだ，ということを理解できないのである[13]。

第2に，「財産はないが精力も能力も堅実さも事業知識等々もある一人

12)　MEGA, II/4.2, S. 412；MEW, Bd. 25, S. 351；拙稿「「利子生み資本」(『資本論』第3部第21章)の草稿について」，『経済志林』第56巻第3号，1988年，24ページ。

の男がこのようにして資本家に転化することができるというこの事情」は，資本主義的生産が高度に発展した現代においてもまったく変わっていない。松下幸之助しかり，田中角栄しかりであり，また教育制度そのものが，成績さえ良ければ奨学金によって大学を卒業して企業のトップに上りつめることができるだけでなく，自己のもとに膨大な額の資本をもつことを可能にしている。「資本家に転化できる」というこのような可能性は万人に開かれているのだから，この社会の諸個人は，競争に勝ち抜きさえすればこの可能性を現実性に転化できるかのような幻想をもたざるをえない。しかし，そのような可能性はまったくの抽象的な可能性でしかないのであって，諸個人がそれを実現できる確率が宝くじの確率ほどに低いものであることは別としても，人々が気づかないのが，「この事情は……資本による支配そのものを強固にし，この支配の基礎を拡大して，それが社会の下層からの新鮮な力によってたえず補充されることを可能にする」という事実であり，資本主義社会においても，「下層諸階級の最もすぐれた人物を自分のなかに吸収する能力が支配階級にあればあるほど，その支配はますます強固でますます危険」なのであって，「いったいに資本主義的生産様式のもとでは各人の商業価値が正しく評価されるもの」としたものであるが，教育制度が「下層諸階級」から「精力も能力も堅実さも事業知識等々もある」人物を的確に選別するという機能を十全に果たすとすれば，それは一方では万人に開かれた民主主義的な制度であるとしても，他方では支配階級の支配を「強固」にし「危険」にするのである。マルクスがここで，「中世のカトリック教会が身分や素性や財産を問題にしないで人民のなかの最良の頭脳で構成されていたという事情が，教階制と俗人抑圧とを強固にするための主要な手段だった」ということと対比しつつ，こうしたことを述べていたのは，資本主義社会における階級支配の現実のあり方

13) 筆者がここで念頭においているのは，宇野弘蔵氏によるマルクスの「利子論の方法」批判である。たとえば，『宇野弘蔵著作集』第9巻，岩波書店，1974年，所収の『経済学方法論』のⅣの「4　利子論の方法」を見よ。

についてのきわめて深い洞察であったと言うべきであろう。

(6) 高利資本の発生とそれの特徴的な存在形態

マルクスは冒頭で，利子生み資本が資本の大洪水以前的形態に属するものであることを述べたのちに，その古風な形態である高利資本の存在に必要なもの，つまりそれの存在条件を簡潔に述べている。すなわち，「生産物の少なくとも一部分が商品に転化しており商品取扱業と同時に貨幣がそのさまざまの機能において発展している」ということである。『1861-1863年草稿』では，もっと一般的に，「高利の発展のためには，商品生産と貨幣での支払の必然性とがいくらか発展しているということのほかにはなにも必要としない」(MEGA, II/3.5, S. 1547)，と言われている。

ここで，「商品生産と貨幣での支払の必然性とがいくらか発展している」という条件のもとで高利資本がなぜ，どのようにして発生するのか，ということを，『資本論』第1部で貨幣蓄蔵について明らかにされていることにもとづいて，簡単に整理しておこう。

マルクスはこの6)のなかで，次のように言う。

> 「生産物の商品としての性格が発展していなければいないほど，交換価値が生産をその十分な広さと深さとにおいて征服していなければいないほど，それだけますます貨幣は，使用価値での富の局限された表現様式に対立して，本来の富として，一般的な富として，現われる。このことに貨幣蓄蔵はもとづいている。」(MEGA, II/4.2, S. 650; 前稿（上），185ページ。)

この貨幣蓄蔵の衝動は，「貨幣の量的制限と質的な無制限との矛盾」によって，「その本性上無際限」である。

> 「貨幣蓄蔵の衝動はその本性上無際限である。質的には，またその形態から見れば，貨幣は無制限である。すなわち，素材的な富の一般的な代表者である。貨幣はどんな商品にも直接に転換されうるからで

ある。しかし，同時に，どの現実の貨幣額も，量的に制限されており，したがってまた，ただ効力を制限された購買手段でしかない。このような，貨幣の量的制限と質的な無制限との矛盾は，貨幣蓄蔵者をたえず蓄積のシシュフォス労働へと追い返す。彼は，いくら新たな征服によって領土を広げても国境をなくすことができない世界征服者のようなものである。」(MEW, Bd.23, S.147；MEGA, II/5, S.90. 強調は初版でのもの。)

マルクスは『経済学批判。第1冊』では，この貨幣蓄蔵者を駆り立ててやまないものについて，「交換価値の交換価値としての，自動体としての運動は，一般的にはただその量的限界を乗り越えようとする運動でありうるだけである」(MEGA, II/2, S.194) と表現している。この「交換価値の交換価値としての，自動体としての運動」は，それが資本の形態をとったときにはじめて現実的なものとなる。

「貨幣蓄蔵は高利においてはじめて実在的となり，その夢を実現する。彼が望むものは，資本〔生産的資本――引用者〕ではなく，貨幣としての貨幣である。そして，利子によって彼はこの蓄蔵貨幣をそのまま資本〔利子生み資本――引用者〕に転化させる。」(MEGA, II/4.2, S.651；前稿（上），185ページ。)

こうして，貨幣蓄蔵者は高利貸になる。

「貨幣が現われれば必然的に貨幣蓄蔵も現われる。とはいえ，職業的な貨幣蓄蔵者は，高利貸に転化するときにはじめて有力になる。」(MEGA, II/4.2, S.646；前稿（上），172ページ。)

高利貸はすでにたんなる貨幣蓄蔵者ではなく，「資本家」であり，利子生み資本の人格化である。そのかぎり，マルクスが『資本論』第1部第4章第1節の「資本の一般的定式」で資本家について次のように述べたことは，高利貸についても完全に妥当する。

「この運動の意識ある担い手として，貨幣所持者は資本家になる。彼の一身，または彼のポケットは，貨幣の出発点であり帰着点であ

る。あの流通の客観的内容――価値の増殖――が彼の主観的な目的なのであって，ただ抽象的な富をますます多く取得することが彼の操作の唯一の起動的動機であるかぎりでのみ，彼は資本家として，または人格化された，意志と意識とを与えられた資本として，機能するのである。だから，使用価値はけっして資本家の直接的目的として取り扱われるべきものではない。個々の利得もまたそうではなく，ただ利得することの無休の運動だけがそうである。この絶対的な致富衝動，この熱情的な価値追求は，資本家にも貨幣蓄蔵者にも共通であるが，しかし，貨幣蓄蔵者は気の違った資本家でしかないのに，資本家は合理的な貨幣蓄蔵者なのである。価値の無休の増殖，これを貨幣蓄蔵者は，貨幣を流通から救い出そうとすることによって，追求するのであるが，もっとりこうな資本家は，貨幣をたえず繰り返し流通に投げ込むことによって，それをなしとげるのである。」(MEW, Bd.23, S.167-168；MEGA, II/5, S.108. 強調は初版のもの。)

このように，生産物が商品となり，商品のなかから貨幣が発生し，商品流通の発展とともに貨幣蓄蔵が行なわれて貨幣蓄蔵者が登場するようになると，彼らのなかから高利貸に転化する者が現われて，彼らの手中に保蔵されていた蓄蔵貨幣を高利資本＝利子生み資本に転化させるようになる。

しかし，蓄蔵貨幣が高利資本に転化し，貨幣蓄蔵者が高利貸に転化するためには，貨幣を借りることを必要とする借り手がいなければならない。この場合の借り手とは，なんらかの理由で貨幣を必要とする者である。ここでは，資本主義的生産様式を前提していないのだから，生産過程に資本として前貸しすべき貨幣を求める借り手すなわち生産資本家はまだまったく問題にならない。

「たとえ資本がまだ生産を支配しておらず，資本主義的生産が，したがって言葉のすぐれた意味での資本が，まだ存在していなくても，たとえば，生産が奴隷制の基礎の上で行なわれていようと，あるいは剰余収益が領主に帰属していようと（アジアや封建時代におけるよう

に)，あるいは手工業や農民経済，等々が行なわれていようと，いずれの場合にも，貨幣はもろもろの生産的な〔「非生産的な」とあるべきところであろう――引用者〕目的のために貸し出されることができ，したがって形態の上では資本として貸し出されることができる。つまり，資本のこの形態は，商人財産がそうであるのと同様に，生産諸段階の発展にはかかわらない（商品流通が貨幣形成にまで進んでいることだけが前提される）のであり，したがってまた，歴史的には資本主義的生産の発展以前に現われるのであって，資本主義的生産の基礎の上では二次的形態をなしているにすぎないのである。商人財産と同じく，それはただ形態の上で資本でありさえすればよく，次のような機能，すなわち，資本はその機能においてはそれが生産を支配する以前から存在することができる，そういう機能における資本でありさえすればよいのであって，ただ生産を支配する資本だけが，社会の独自の歴史的生産様式の基礎なのである。」(『1861-1863年草稿』，MEGA, II/3.1, S.27.)

このように，資本主義的生産がまだ存在していなくても，貨幣は「形態の上では資本として貸し出されることができる」というだけではない。マルクスは『1861-1863年草稿』で，利子生み資本と商業資本がなぜ資本主義的生産様式が成立するよりもまえに発展するのか，ということについて，次のように書いている。

「資本が生産を自己に従属させるときにそれのとる現実の姿態が，つまり資本が近代社会の基本形態をなすさいにそれのとる姿態が現われるよりもまえに，なぜ，資本が商業資本および高利資本として――この二つの形態で貨幣財産として――発展するのか，ということの要点は，生産物がまずもって交換価値として，流通のなかで発展するということ，すなわち生産物が流通のなかで，まずもって商品および貨幣になるということにある[14]。資本は，流通過程のもろもろの極――流通過程が媒介するさまざまな生産部面――を支配するよりもまえ

に，流通過程で形成されることができるし，流通過程で形成されなければならない。貨幣および商品流通は――だからまた貨幣および商品資本も――，内的な構造から見ればまだ主として使用価値の生産に向けられていてきわめてさまざまな組織をもつ生産諸部面を媒介することができる。生産諸部面が第三者によって互いに連関させられている流通過程がこのように自立化しているということは，二つのことを表現する。すなわち，一つには，流通がまだ生産を支配していないで，生産にたいして無関心な前提，与えられた前提にたいする様態で関わっているということであり，一つには，生産過程が流通の過程を自己のたんなる契機として自己のなかに受け入れることをし終えていないということである。」(『1861-1863年草稿』，MEGA，II/3.5，S.1550-1551.)

つまり，「資本は，流通過程のもろもろの極――流通過程が媒介するさまざまな生産部面――を支配するよりもまえに，流通過程で形成されることができるし，流通過程で形成されなければならない」。むしろ，利子生み資本が資本の支配的な形態であるときには，利子生み資本は資本にたいして生産そのものに参加することを妨げるのである。

「商業資本は，それが資本の支配的な形態であるときには，資本主義的生産様式とは別の生産諸様式を前提とする〔bedingen〕。利子生み資本としての G_G′ はそれ以上にそうである。利子生み資本が前提する〔unterstellen〕のは商品生産，貨幣，貨幣流通および商品流通であり，それが資本の支配的形態であるときには，それは資本を生産そのものにはまったく参加させないのである。」(『1861-1863年草稿』，

14)　この一文は，『資本論草稿集』⑧では，「なぜ資本は，それが生産を支配するその現実の姿態，つまり近代社会の基本形態をなす姿態として姿を現わすよりも前に，商業資本および高利資本として――貨幣財産としてのこうした二つの形態で――発展するのか，という歴史については，生産物がまず最初に流通のなかで交換価値として発展するという歴史，すなわち生産物が流通のなかでまず最初に商品および貨幣になるという歴史こそが，その要点なのである」(14ページ)，と訳されているが，このうちの「歴史」は Geschichte を誤訳したもので，原文の意味をわけのわからないものにし，読者を混乱させるものとなっている。

MEGA, II/3.4, S.1468.)

それでは，高利資本の借り手は，生産的資本として生産過程に前貸しするという目的以外のどういう目的のために貨幣を必要とするのであろうか。

マルクスはまず，借り手が，支出したのちにいずれは戻ってくることを期待することができる貨幣を求める場合について述べている。それは，前項でもすでに触れた，貨幣取扱資本を含む商人資本への貸付の場合である。

「商人が貨幣を借りるのは，貨幣を用いて利潤をあげるためであり，それを資本として充用する（支出する）ためである。だから，初期の諸形態のもとで商人に貨幣の貸し手が対立するのも，近代的資本家に彼が対立するのとまったく同じである。」(MEGA, II/4.2, S.646；前稿（上），172ページ)。

マルクスは『1861-1863年草稿』でも，「中世における法外な利子は（封建貴族などから取り立てられるのでないかぎり），都市では，大部分は，商人や都市工業者が農村からだまし取ることによって得ていた巨大な譲渡利潤に基づいていた」(MEGA, II/3.4, S.1538)，と言い，「貨幣資本が商業資本と結合するかぎり，それが商業資本にたいしてもつ関係は，利子生み資本が資本主義的生産一般の基礎の上でその資本にたいしてもつ関係と同じである」(MEGA, II/3.5, S.1548)，と言っている。

さらに，戻ってくることを期待して支出される貨幣として，次のものを挙げる。

「奴隷経済（家長制的なそれではなく後のローマ・ギリシア時代のそれのような）が致富の手段として存在しておりしたがって貨幣が（奴隷や土地などの購入によって）他人の労働を取得するための手段であるような，すべての形態のなかでは，貨幣は，それをこのように投下することができるからこそ，資本として増殖できるものとなり，利子を生むものとなる。」(MEGA, II/4.2, S.647；前稿（上），173ペ

ージ。)

しかし，商業資本への貸付も奴隷経済のもとでの致富手段としての貨幣の貸付も，「資本主義的生産様式以前の時代に高利資本が存在するさいの特徴的な形態」ではない。マルクスはこのような形態として，次のものを挙げる。

「資本主義的生産様式以前の時代に高利資本が存在するさいの特徴的な形態には，二つのものがある。……〔第1に〕浪費をこととする貴人（おもに土地所有者）への貨幣貸付による高利である。第2に，自分自身の労働諸条件をもっている小生産者への貨幣貸付による高利である。この小生産者のうちには手工業者も含まれているが，しかしまったく独自に農民が含まれている。というのは，そもそも，この生産様式が行なわれている状態にあっては，農民階級がそうした自給自足の小生産者の大多数をなさざるをえないからである。」(MEGA, II/4.2, S.647；前稿（上），173ページ。)

そして，このような高利資本に対応するのは「小生産の優勢」であると言う。

「利子を生む資本の特徴的な形態としての高利資本は，小生産の優勢に，すなわち自営の農民などの優勢に，対応する。……労働者が自分の労働諸条件や自分の生産物の所有者（現実のまたは名目上の）である場合には，彼は生産者として，自分に高利資本として相対する利子生み資本（貨幣貸付業者）と関係をもつのである。……貧しい生産者を相手に活動するその同じ高利に，富裕な大土地所有者から搾取する高利が対応しているのである。」(MEGA, II/4.2, S.647-648；前稿（上），174-175ページ。)

これらの二つの特徴的な形態で貨幣が求められるのは，主として，購買手段および支払手段としての支出の必要である。

まず購買手段としての貨幣の必要については，次のように述べられている。

「貨幣が（小農民的産業や小市民的産業で）購買手段として必要とされるのは，おもに，生産諸条件が労働者の手から｛これらの生産様式では労働者はまだ生産諸条件の所有者である｝災害や異常な震撼のために失われてしまうか，または少なくとも再生産の普通の経過では補塡されない場合である。生活手段や原料等々はこのような生産諸条件のなかにはいるべきものである。これらのものの騰貴が，生産物の売上金からこれらのものを補塡することを，また，不作のときに農民がそれらを現物で補塡することを，不可能にすることがありうる。」(MEGA, II/4.2, S.651；前稿（上），186-187ページ。)

その例として次のようなものが挙げられている。

「いくつかの例。――戦争によつてローマの貴族は平民を破滅させ，彼らに軍務を強制し，軍務は彼らの労働条件の再生産を妨げ，したがって彼らを貧困化した｛そしてここではこのことが優勢な形態である。すなわち貧困化とは再生産諸条件の萎縮または喪失なのである｝のであるが，この同じ戦争が貴族のために分捕品の銅すなわち当時の貨幣で倉庫や地下室を一杯にした。貴族は平民に穀物や馬などの商品を直接には渡さないで，この不用な銅を平民に貸し付け，この状態を法外な高利に利用した。……個々に見れば，生産者にとっての生産諸条件の維持または喪失は無数の偶然事にかかっており，また，このような偶然または喪失――貧困化――のそれぞれが高利寄生者が付着できる点になる。一小農民にとっては，ただ一頭の牛が倒れただけでも，彼の再生産をこれまでの規模で再開することができなくなるのに十分である。ここに高利が入り込むのである。」(MEGA, II/4.2, S.651；前稿（上），186-188ページ。)

次に，支払手段としての貨幣の必要について。

「世界貨幣および蓄蔵貨幣としての貨幣を別とすれば，とくに支払手段の形態こそは，貨幣が商品の絶対的な形態として現われるものである。また，とくに支払手段としての貨幣の機能こそは，利子を，し

たがってまた貨幣資本を発展させるものである。浪費をことごとし退廃をひき起こす富が欲するものは，貨幣としての，一般的購買力としての貨幣である。(また債務支払のための〔貨幣もそうである〕。) 小生産者が貨幣を必要とするのは，なによりもまず支払のためである。{この場合にはもろもろの租税もまた役割を演じる。} どちらの場合にも貨幣は貨幣として必要とされるのである。」(MEGA, II/4.2, S.651-652；前稿（上)，185ページ。)

商品の購買と支払の時間的分離から生じる支払手段としての貨幣の機能は，貨幣を「契約の一般的商品」としないではいない。この点については，『経済学批判。第1冊』でも『資本論』第1部第3章でも，すでに次のように述べられていた。

「一般的支払手段としては，貨幣は契約の一般的商品となる。――はじめはただ商品流通の領域の内部でだけだが。けれども貨幣のこの機能の発展につれて，他のすべての支払の形態はしだいに貨幣支払に解消していく。貨幣が排他的支払手段として発達している程度は，交換価値が生産をどれだけ深くまた広くとらえているかという程度を示している。」(MEGA, II/2, S.206.)

「商品生産が或る程度の高さと広さとに達すれば，支払手段としての貨幣の機能は商品流通の部面を越える。貨幣は契約の一般的商品となる。地代や租税などは現物給付から貨幣支払に変わる。」(MEW, Bd.23, S.154；MEGA, II/5, S.96. 強調は初版のもの。)

ここから，社会のあらゆる構成員のところで，ありとあらゆる種類の貨幣支払の必要が生じ，ここに高利がとりつくようになる。

「支払手段。これは高利の本来の大きな特有な地盤である。一定の期限に納入されるべき貨幣納付，すなわち借地料や租税等々はみな貨幣支払の必要を伴っている。(概して高利は，古代ローマから近代に至るまで，徴税請負人につきものである。) 次いで，商業の発展等々につれて，購買と支払との分離が発展する。貨幣は一定の期限に引き

渡されなければならない。このことが，今日では貨幣恐慌のときに自己の姿を現わすのである。」(MEGA, II/4.2, S. 652；前稿（上），188-189ページ。)

しかも，ここに高利がとりつくと，今度は高利が，これはまたこれで，支払手段としての貨幣の必要を発展させるようになる。

「この同じ高利は，支払手段としての貨幣の必要を発展させる主要手段になる。なぜならば，高利は生産者をますます深く債務におとしいれるからであり，また，利子の重荷で彼の生産を不十分にすることによって彼の日常の支払手段をなくさせてしまうからである。ここでは高利は支払手段としての貨幣から成長して，貨幣のこの機能すなわち自己の最も固有な地盤を拡張するのである。」(MEGA, II/4.2, S. 652；前稿（上），189ページ。)

しかも，高利資本の貸し手と借り手との関係は，債権者と債務者との関係であり，この債権債務関係を清算する貨幣の支払は，元金の返済も利子の支払もともに支払手段としての貨幣の流通である。こうして，債権者と債務者との関係は，商品流通にはまったくかかわりのないさまざまの敵対関係を反映するものとなる。

「債権者または債務者という役割は，ここでは単純な商品流通から生じる。……しかしまた，同じこれらの役割は商品流通にかかわりなく現われることもありうる。たとえば，古代世界の階級闘争は，主として債権者と債務者との闘争というかたちで行なわれ，そしてローマでは平民債務者の没落で終わり，この債務者は奴隷によって代わられるのである。中世には闘争は封建的債務者の没落で終わり，この債務者は彼の政治権力をその経済的基盤とともに失うのである。ともあれ，貨幣形態――債務者と債権者との関係は一つの貨幣関係の形態をもっている――は，ここでは，ただ，もっと深く根ざしている経済的生活条件の敵対関係を反映しているだけである。」(MEW, Bd. 23, S. 149-150；MEGA, II/5, S.92-93.)

「売り手と買い手は，債権者と債務者になる。商品所持者は，蓄蔵貨幣の保管者としてまえには三枚目の役割を演じたのに，こんどは彼は，自分自身ではなくその隣人を一定の貨幣額の定在と考え，自分ではなくこの隣人を交換価値の殉教者にするので，恐ろしいものとなる。彼は信心家〔ein Gläubiger〕から債権者〔Gläubiger〕となり，宗教から法学に転落する。

「証文どおりに願います！」」(MEGA, II/2, S.201.)

高利資本の特徴的な存在形態の一つである「浪費をこととする貴人(おもに土地所有者)への貨幣貸付による高利」については，マルクスはサー・ダッドリ・ノースの所説に注目している。

「土地所有者への(したがってまた総じて享楽的富への)貸付が近代的信用システムの発展以前に，イギリスにおいてさえも17世紀の最後の3分の1期にどんなに優勢だったかは，なかんずく，当時の一流のイギリス商人の一人だっただけでなく最も重要な理論的経済学者の一人でもあったサー・ダッドリ・ノースの所説から見て取ることができる。」(MEGA, II/4.2, S.658；前稿(上)，198ページ。)

なお，このノースについて，マルクスは『1861-1863年草稿』で，ペティおよびロックの「系統」につながるものだとして，次のように書いていた。

「サー・ダッドリ・ノース『交易論，云々』，ロンドン，1691年。……この著作は，ロックにおける経済学上の仕事がそうであったのとまったく同様に，ペティの諸著作に直接に関連しており，また直接にそれを基礎としている。……

1650年から1750年までの100年間は，ほとんど例外なしに金貸し連中〔moneyed interest〕と地主連中〔landed interest〕との闘争に満ち満ちている。というのは，のんきに暮らしていた貴族階級は，高利貸たちが彼らをとらえ，17世紀末以降の近代的な信用システムおよび国債システムの形成以来，立法などにおいて彼らに対抗して優勢にな

ってきたさまを，嫌悪の目で見ていたからである。

すでにペティは，地主たちが地代の低落を嘆いていることや，彼らが改良に反対していることについて語っている。……彼は，地主に対抗して高利貸を弁護し，貨幣の賃料〔rent of money〕と土地の賃料〔rent of land〕とを同列に置くのである。

ロックは，これら二つの賃料を労働の搾取に帰着させる。ペティと同じ立場に立っているのである。二人とも利子の強力的な規制に反対する。地主連中は，利子が低落したときに土地の価値〔value of land〕が上昇したことに気づいていたのだった。地代の額が与えられていれば，その資本還元された表現，すなわち土地の価値は，利子率に反比例して騰落するのである。

こうしたペティ的な系統に連なる第3の人物が，さきに引用した著作でのサー・ダッドリ・ノースである。

これこそは，資本が土地所有に対抗して立ち向かった最初の形態である。というのも，実のところ，資本蓄積のための主要な手段は高利〔usuary〕，すなわち，地主の諸収入にたいする資本の共同所有権[15]〔coproprietorship〕だったからである。しかし，産業資本と商業資本は，多かれ少なかれ地主と手を携えて，資本のこの古風な形態に対抗するのである。」（『1861-1863年草稿』，MEGA，II/3.6，S.2317-2318.）

15) ここでの「資本の共同所有権〔coproprietorship〕」という表現の意味するところは，同じ『1861-1863年草稿』のなかの次の箇所での「共有物〔Copropriété〕」の意味するところと基本的に同じである。

「一方では労働者がまだ独立したものとして現われており，したがって賃労働者としては現われていないが，しかし，他方では労働者の対象的諸条件すなわち生産物がすでに彼らと並んで一つの独立した存在をもっている――高利貸という特殊的な一階級の共有物〔Copropriété〕をなしている――という関係は，多かれ少なかれ交換を基礎とするすべての生産様式において，農業財産や工業財産という限られた形態とは対立する貨幣財産の発展（これこそこの関係の発展そのものである）につれて必然的に発展する。」（MEGA，II/3.5，S.1545.）

(7) 前資本主義的生産様式の破壊者としての高利資本

高利資本の特徴的な存在形態である，浪費者（おもに土地所有者）および小生産者への貨幣貸付による高利の場合には，借り手が必要とする貨幣は一般に，商業資本への貸付や奴隷経済のもとでの致富手段としての貨幣の貸付の場合とは異なり，いずれは戻ってくることを期待することができる使途に支出されるのではない。

そこで，この場合の高利による利子の取得は，「資本の生産様式のない資本の搾取」(MEGA, II/4.2, S.650；前稿（上），184ページ）でしかない。

> 「高利は生産様式を変化させないで寄生虫としてそれに付着し，それを困窮させる。高利は生産様式を吸い尽くし，それを衰弱させ，そして，再生産がますますひどい諸条件のもとで行なわれるようにする。それだからこそ高利にたいする民衆の憎悪が生じるのであり，古代世界ではますますもってそうなるのである。というのは，そこでは生産者が自分の生産諸条件の所有者であることが同時に政治的諸関係の基礎であり，市民の自立性の基礎だったからである。
>
> 奴隷制が行なわれているかぎり，あるいはまた剰余労働が封建領主やその家臣によって食いつぶされてしまうかぎり，そして封建領主やその家臣が高利の手中に陥っているかぎり，生産様式はやはり同じままであり，ただそれがいっそう苛酷になるだけである。債務を負った奴隷所有者や封建領主がますます多く吸い取るのは，彼自身がますます多く吸い取られるからである。あるいは，彼はついに高利貸に席を譲ってしまい，高利貸自身が土地所有者等々になるのであって，ちょうど古代ローマの騎士等々がそれである。昔の搾取者が行なう搾取は多かれ少なかれ政治的権力手段だったが，この搾取者に代わって，粗暴な，金銭をあさり回る成り金が現われる。しかし，生産様式そのも

のは変えられない。」(MEGA, II/4.2, S. 649；前稿（上），179-180ページ。)

だから高利は，まずもって，直接生産者の剰余労働のすべてを飲み尽くしてしまう。

「ここでは，利子という形態で，生産者の労賃｛かつかつの生計手段｝を越えるすべての超過分（後には利潤や地代として現われるもの）が高利貸によって呑みこまれてしまうこともありうる。……この形態では実際に高利資本は生産様式を変えることなしに直接生産者のすべての剰余労働をわがものにするのであり，またこの形態では生産者による労働諸条件の所有（または占有）――そしてそれに対応する個別化された生産――が内在的な規定なのであり（ここでは資本は労働を直接には自己のもとに包摂せず，したがってまた産業資本として労働に対立せず），この生産様式を窮乏させ，生産力を発展させないで麻痺させ，同時にこのような悲惨な状態を永久化する……。」(MEGA, II/4.2, S.648-649；前稿（上），176-178ページ。)

だが，高利は剰余労働を吸い尽くすだけで満足しない。「高利貸は貨幣を必要とする人々の支払能力または抵抗能力のほかにはまったくなんの限度も知らない」(MEGA, II/4.2, S.651；前稿（上），186ページ)。だから，「高利貸は自分の犠牲者の剰余労働を搾取するだけでは満足しないで，その犠牲者の労働条件そのもの，土地や家屋などの所有権を次々に自分のものにして行き，こうしてたえず犠牲者から収奪することに没頭する」(MEGA, II/4.2, S.648；前稿（上），177ページ)。こうして高利資本は，もろもろの前資本主義的生産様式の破壊者として作用するのである。

「高利は，一方では，封建的富（および古代的富）および所有の破壊者として〔作用する〕。他方では，それは，小ブルジョア的，小農民的生産の，要するに生産者がまだ自分の生産手段の所有者として現われているようなすべての形態の破壊者として〔作用する〕。」(MEGA, II/4.2, S.649；前稿（上），178-179ページ。)

その結果，高利は旧来の生産様式の没落を生じさせることになる。

「ローマの貴族がローマの平民――小農民――をすっかり破滅させてしまったとき，この搾取形態は終りを告げたのであって，そのとき純粋な奴隷経済が小農民経済にとつて代わった。」(MEGA, II/4.2, S.648；前稿（上），175ページ。)

ただしアジア的生産様式の場合には，高利はこの生産様式を消滅させないままこれに吸着し続けて，「経済的衰微と政治的腐敗」だけをもたらすことができる。

「アジア的な諸形態のもとでは，高利は，経済的衰微と政治的腐敗とのほかにはなにもひき起こすことなしに長く存続することができる。」(MEGA, II/4.2, S.650；前稿（上），181ページ。)

高利が取り尽くすのは，旧来の富すなわち生産手段および生活手段だけではない。借り手である労働する個人までもわがものにするのである。

法外な利子は，「ローマでは，アテネなどのようなとくに産業的および商業的に発達していた商業都市を別として，全古代世界でそうだったように，大土地所有者たちにとっては，たんに小土地所有者や平民を収奪するためだけではなく彼らの人身そのものをわがものにするための手段だった。」(『1861-1863年草稿』，MEGA, II/3.4, S.1538.)

(8) 資本主義的生産様式の生成に高利資本が果たした役割

高利はそれが吸着する前資本主義的生産様式を破壊し崩壊させるが，そのあとにどのような生産様式が新たに発生し発展するかということは，高利が破滅させる旧来の生産様式の性格次第である。高利が旧来の生産様式を破滅させたのちに新たに生成してくる生産様式が資本主義的生産様式である場合には，高利のこの作用は，資本主義的生産様式の成立を準備し促進するものだということになる。しかしマルクスは，高利がこのような仕方で作用するためには特定の歴史的事情が必要であることを強調してい

る。

「どちらも，つまり高利による富裕な土地所有者の破滅も小生産者たちの搾取も，ともに大きな貨幣資本の形成と集中とに通じる。しかし，どの程度までこうした過程が（近代ヨーロッパでの結果がそうであったように）古い生産様式を廃止するのかということは，またそれが資本主義的生産様式をつくりだすかどうかということは，まったく，歴史的な発展段階に，またそれとともに与えられる諸事情にかかっている。」(MEGA, II/4.2, S.647；前稿（上），174ページ。)

「資本主義的生産様式のそのほかの諸条件が存在するところで，またそれが存在するときに，はじめて，高利は，新たな生産様式の形成手段の一つとして，封建領主や小生産の没落――資本としての労働諸条件の集中の手段〔――として〕現われるのである。」(MEGA, II/4.2, S.650；前稿（上），181ページ。)

それでは，高利が資本主義的生産様式の成立を促進することができるような歴史的事情とはどのようなものであろうか。そしてまた，そこでは高利はどのような仕方で資本主義的生産の成立を準備し促進するのであろうか。それは，端的に言って，次のことに帰着する。

「この資本〔高利資本〕の作用が，政治的な――古代〔ローマ〕の〔ひどい混乱〕状態等々を解体する〔Auflösung der Zustände, wie im Alterthum etc〕というような――意味ではなく，歴史的な意味をもつかぎりでは，それは一方では，労働者から労働諸条件を分離することであり，また同じことを別の言葉で言えば〔was dasselbe in andren Worten〕，この分離によって，のちにこの生産諸条件を商品として買うことになる貨幣財産を形成することである。」(『1861-1863年草稿』，MEGA, II/3.5, S.1546.)

すなわち，高利資本が資本主義的生産様式の成立のために果たす役割というのは，一方では，労働する諸個人から労働諸条件を，すなわち彼らが労働するために必要な諸条件を分離すること，収奪すること（すなわち所

有を取り上げること）であり，他方では，この分離によって自らのもとに貨幣財産を形成することであるが，この二つは「同じことを別の言葉で言うこと〔was dasselbe in andren Worten〕」なのである。すなわち，直接生産者から生産諸条件を失わせることによって自らの貨幣財産を形成する，ということである。マルクスにあっては，この二つのことは同じ事態の表裏の関係にある。彼は『1861-1863年草稿』で次のように言う。(冒頭の一文は「6)」に取り入れられている（MEGA, II/4.2, S.656；前稿(上)，192ページ。))。

「高利が二つのことを実現するかぎり，すなわち，第1には一般に自立的な貨幣財産を形成するということを実現し，第2には労働諸条件をわがものにするということ，すなわち旧来の労働諸条件の所持者たちを滅ぼすということを実現するかぎり，高利は産業資本のための諸前提を形成するための強力な手段――生産者からの生産諸条件の分離における強力な一能因――である。それは商人とまったく同様である。両者に共通なのは，自立的な貨幣財産を形成するということ，すなわち，年々の剰余労働のうちの，また労働諸条件のうちの，さらにまた年間労働の蓄積のうちの一部分を，貨幣請求権の形態で，自分の手のなかに蓄積するということである。現実に彼らの手のなかにある貨幣は，一部は，年間の貨幣蓄蔵のうちの，また年々蓄積される蓄蔵貨幣のうちの一小部分を，一部は，流通している資本のうちの一小部分をなしているにすぎない。彼らが貨幣財産を形成するということは，一部は年間生産の一大部分が，一部は年間収入の一大部分が彼らの手にはいって，しかも現物でではなくて貨幣という転化した形態で支払うことができるということである。それゆえ，貨幣が現実に通貨として流通しておらず，運動していないかぎりでは，それは次のようにして彼らの手のなかに蓄積されているのである。一部は，彼らの手のなかには流通貨幣の貯水池もあるが，彼らの手のなかにそれよりもさらに多くあり，また蓄積されているのは，生産にたいする請求権，

といっても貨幣に転化した商品にたいする請求権としての，つまり貨幣請求権としてのそれである。高利は，一方では，封建的な富と所有との破壊者として〔作用する〕。他方では，小ブルジョア的，小農民的生産の，要するに生産者がなお彼の生産手段の所有者として現われているようなあらゆる形態の，破壊者として〔作用する〕。」（『1861-1863年草稿』，MEGA, II/3.4, S.1528.）

つまり，高利が労働する諸個人から分離させた労働諸条件は，労働諸条件の形態のまま高利のもとに蓄積されてはいないが，それらにたいする貨幣請求権の形態で蓄積されるのであり，それが高利のもとにある「貨幣財産〔Geldvermögen〕」なのである。

この貨幣財産についてさらに注目すべきは，土地所有との関係である。「6)」のなかに見られる，次の覚え書き的な文章はどのようなことを言おうとしているのであろうか。

「高利は，消費的な富に比べれば，それ自身資本の成立過程として歴史的に重要である。（商人財産ともども）土地所有に依存しない貨幣財産の形成。」（MEGA, II/4.2, S.650；前稿（上），184ページ。）

マルクスは，『資本論』第1部第4章「貨幣の資本への転化」の最初の部分で，次のように書いている。

「歴史的には，資本は，土地所有にたいして，どこでも最初はまず貨幣のかたちで，貨幣財産として，商人資本および高利資本として相対する。とはいえ，貨幣を資本の最初の現象形態として認識するためには，資本の成立史を回顧する必要はない。同じ歴史は，毎日われわれの目の前で繰り広げられている。どの新たな資本も，最初に舞台に現われるのは，すなわち市場に，商品市場や労働市場や貨幣市場に姿を現わすのは，相変わらずやはり貨幣としてであり，一定の過程を経て資本に転化すべき貨幣としてである。」（MEW, Bd.23, S.161；MEGA, II/5, 102．強調は初版のもの。）

ここで，「資本が土地所有にたいして，貨幣財産として，商人資本およ

び高利資本として相対する」と述べられていることの意味は，『1861-1863年草稿』での次の記述[16]から読み取ることができる。

「利子のもう一つの形態，――（奴隷制，農奴制，またそれらにもとづく財産や収入の場合であろうと），――消費する富への資本の貸付。この場合には，資本の一つの成立過程が，それ自体として歴史的に重要なものとして現われる。というのは，土地所有者の収入や地代，それにしばしば土地までも，高利貸たちの手もとに累積して資本化されることになるからである。これこそは，貨幣すなわち流通する資本が，土地所有から独立した一階級のもとに蓄積される諸形態の一つである。」（『1861-1863年草稿』，MEGA, II/3.5, S.1546.）

すなわち，高利が土地所有（土地所有者）からその収入や土地を取り上げて貨幣財産を形成していく過程が資本形成の重要な一契機をなすのである。このように「高利貸や商人などが「貨幣財産」をもつということは，商品および貨幣として現われるかぎりでの国民の財産が彼らの手のなかに集中されるということにほかならない」（『1861-1863年草稿』，MEGA, II/3.4, S.1531-1532）。

資本主義的生産様式の歴史的生成とは，労働する諸個人と労働諸条件とが分離させられることによって，一方に労働力しかもたない労働者と，他方に自立化した労働諸条件およびそれにたいする貨幣請求権である貨幣財産とが生みだされることである。これによって，後者が商品として買った前者の労働力を生産過程で消費することができるようになるのである。マルクスはこの貨幣財産に，商人資本および高利資本のもとに形成されるもののほかに，「借地農業者，農民，等々の蓄蔵」があることを認めていた。しかし彼は，これらが果たす役割は前者に「劣る」ものと考えていた。

「ところで，資本に転化する以前の貨幣財産そのものの形成について言えば，それはブルジョア経済の前史に入れられるべきものであ

16)　この文章は「経済学批判要綱」（MEGA, II/1.2, S. 717）から若干の手を加えて取り入れられたものである。

る。この形成のさいには，高利貸，商業，都市制度，そしてこれらとともに登場する国庫が，主役を演じる。また，借地農業者，農民，等々の蓄蔵もまた，程度は劣るが，同じ役割を演じる。」(「経済学批判要綱」，MEGA, II/1.2, S.411.)

次のところでは，「たんなる等価物の交換という方法で貨幣が部分的に蓄積される」が，これは「わずかな源泉をなすにすぎないので，歴史的には述べるに値しない」とさえ言っている。

「貨幣の形態で現存する富が労働の客体的諸条件と置き換えられることができるのは，ただ，この客体的諸条件が労働そのものから引き離されているからであり，また引き離されている場合だけである。たんなる等価物の交換という方法で貨幣が部分的に蓄積されうることはすでに見た。しかしながらこれは，わずかな源泉をなすにすぎないので，歴史的には述べるに値しない。貨幣が自己の労働の交換によって獲得される，ということが前提される場合にはそうなのである。本来の意味での資本，すなわち産業資本に転化されるのは，むしろ，高利貸付――とくにまた土地所有にたいしてなされた高利貸付――によって，また商人利得によって溜め込まれた動産，すなわち貨幣財産である。」(「経済学批判要綱」，MEGA, II/1.2, S.407.)

だからこそ，『資本論』第1部第24章第6節の「産業資本家の生成」の冒頭で次のように書いたのである。

「産業資本家の生成は，借地農業者のようにだんだんに進行したのではなかった。疑いもなく，多くの小さな同職組合親方や，もっと多くの独立の小工業者たちが，あるいはまた賃労働者さえもが，小資本家になり，そして，賃労働の搾取の漸次的拡大とそれに対応する蓄積とによって，文句なしの資本家になった。……しかし，この方法の蝸牛の歩みは，けっして，15世紀末のもろもろの大発見がつくりだした新たな世界市場の商業要求に応じるものではなかった。しかし，中世はすでに二つの違った資本形態を伝えていた。すなわち，非常にさま

ざまな経済的社会構成体のなかで成熟して資本主義的生産様式の時代以前にもそも資本なるもの〔Kapital quand même〕として認められている二つの形態——高利資本と商人資本とがそれである。……

高利と商業とによって形成された貨幣資本は，農村では封建制度によって，都市では同職組合制度によって，産業資本への転化を妨げられた。このような制限は，封建家臣団が分解され，農村民が収奪されてその一部分が追い出されると同時に，なくなった。新たなマニュファクチュアは輸出海港に設けられ，あるいはまた古い都市やその同職組合制度の支配外にあった田舎の諸地点に設けられた。それゆえ，イギリスでは，これらの新しい工業培養場にたいする自治都市の激しい闘争が起こったのである。」(MEW, Bd.23, S.777-778；MEGA, II/5, S.600-601. 強調は初版のもの。)

以上見てきたところから明らかなように，マルクスにあっては，一方での貨幣財産の形成と他方での労働者からの労働諸条件の分離とは別々の歴史的過程なのではなくて，同じ過程の二つの側面であり，高利がこの過程を促進するかぎりでは，高利は資本主義的生産様式の生成にとってきわめて重要な意味をもつものであった。「6)」に見られる，さきの，「高利はそれ自身資本の成立過程として歴史的に重要である」と言い，続けて「土地所有に依存しない貨幣財産の形成」と書いていたのは，このことを示すものであった。

この「6)」あるいはエンゲルス版の第36章でマルクスが述べていること

17)　関口尚志氏は，『資本論体系』⑥「利子・信用」のなかのエンゲルス版第36章の「原典解説」で，「高利資本の歴史的役割」として，「旧所有形態の破壊」と「保守的・寄生的性格」の二つの点を挙げられているが，「資本の成立過程として歴史的に重要」な，土地所有に対抗して貨幣財産を形成するものとしての高利資本の役割には一言も触れられていない。これは，「前期的資本」としての高利資本は「保守的・寄生的性格」をもつものであって，そのもとで形成される貨幣財産は，むしろ，資本主義的生産の生成に対抗するものであって，資本主義的生産の成立にとっては「中産的生産者層」のもとでの「国民的富の形成」こそが決定的な意味をもつ，という把握にもとづくものであろう。だが，ページ数の制限があったとしても，マルクスの「原典解説」のなかで，高利資本のもとでの貨幣財産の形成が資本の成立過程に果たした役割についてのマルクスの主張にまったく触れないのは奇妙なことである。

を把握するさいには，このことを欠落させることは許されないであろう[17]。

(9) 利子率の強制的引き下げのための闘争

さて，前項で見たように，高利は一定の歴史的諸条件が存在するところでは，資本主義的生産様式の成立を準備し促進するものとして現われる。

「資本主義的生産に必要なその他の諸条件――自由な労働，世界市場，旧来の社会関連の分解，ある段階への労働の発展，諸科学の発展，等々――が存在する時代に，はじめて高利は，新たな生産様式の形成手段の一つとして現われる。〔それは〕同時に，封建領主たちの，すなわち反ブルジョア的要素の支柱たちの没落〔であり〕，また，小工業や小農業などの没落，要するに，資本としての労働諸条件の集中の手段〔である〕。」(『1861-1863年草稿』，MEGA, II/3.4，S.1531.)

しかし，高利のもとに形成された貨幣財産は，そのまま生産的資本に転化することができるわけではない。貨幣財産は生産過程から切り離されたところに自立的な形態で存在するのであって，高利貸自身が資本家的生産者に転化するのはほとんど例外でしかないからである。そこで資本主義的生産は，高利貸の手もとにある貨幣財産を自己のもとに従属させ，それを自己のもとで生産的資本に転化させなければならない。だから，利子生み資本を自己に従属させるために，「資本主義的生産は最初は，高利貸自身が生産者になるのでないかぎり，高利と闘わなければならない」(『1861-1863年草稿』，MEGA, II/3.4，S.1532)。

それでは，資本主義的生産は高利とどのように闘って，産業資本への利子生み資本の従属を実現したのか。

マルクスはこの「6)」で，産業資本が利子生み資本を自己に従属させるこの歴史的過程を，第1に，産業資本がまずもって国家を利用して利子率の強力的な引き下げをはかる段階と，第2に，十分強くなって自己の地歩

を固めた産業資本が，自己に特有な形態である信用制度を創造することによって，利子生み資本を自己に最終的に従属させていく段階との，二つの段階があったとしている。

生成しつつある産業資本が目の前にみたのは，労働者から分離された労働諸条件が貨幣請求権の形態で高利資本のもとに強大な貨幣財産として形成されていという事実であった。産業資本はまずもって，この貨幣財産を自己の生産的目的のために使用できるようにするために，高利資本と闘わなければならなかった。

しかし，産業資本の高利との闘いは，この形態で存在する利子生み資本そのものを打倒する闘いではなく，闘いの目的は，利子付き貸付を承認した上で，蓄積されている貨幣財産を低い利子率で生産的目的に利用できるようにすることであり，したがって，高利資本を自己に従属させるための闘いであった。

「信用制度の発展は高利にたいする反作用として実現される。

しかし，このことを誤解してはならない。……

このことが意味しているのは，利子生み資本が資本主義的生産様式の諸条件と諸要求とに従属するということ以上のなにものでもないし，またそれ以下のなにものでもないのである。だいたいにおいて利子生み資本は近代的信用制度のもとでは資本主義的生産様式の諸条件に適合させられる。高利そのものは，存続するだけでなく，資本主義的生産様式の発達している諸国民のもとでは，すべての古い立法がそれに課していた制限から解放されるのである。……

それだからこそ，利子生み資本一般を追放することからではなく，反対にそれを公然と承認することから，近代的信用システムの創始者たちは出発するのである。」(MEGA, II/4.2, S.652；前稿（上），200-204ページ。)

マルクスは，この闘いがどのように開始され，どのようにして「自由な高利が資本主義的生産の要素として承認される」に至ったかを，『1861-

1863年草稿』で次のように素描している。

「古代の世界では，より良い時代には，高利は禁止されていた。（すなわち利子は許されていなかった。）のちには法律によって〔禁止された〕。非常に優勢〔であり，〕理論的にはつねに（アリストテレスにおけるように）〔そうであったのは，〕利子はそれ自体として悪いという見解〔である〕。

キリスト教的中世には，〔利子付き貸付は〕「罪悪」であって，「教会法上」禁止されていた。

近世。ルター。まだ，カトリック的・異教的な表現様式。〔利子付き貸付は〕非常に広がりつつある。（一部は政府が貨幣を必要としたことの結果であり，商工業の発達，生産物の貨幣化の必要〔の結果である〕。）しかしすでに高利のブルジョア的正当化が主張される。

オランダ，最初の高利弁護論。そこではまた高利がはじめて近代化され，生産的資本または商業資本に従属させられる。

イングランド。17世紀。論難はもはや高利そのものにではなく，利子の大きさに，信用にたいする利子の圧倒的な割合に向けられる。信用形態を創造しようとする衝動。〔利子率引き下げのための〕強力的な諸規定。

18世紀。ベンサム〔『高利擁護論』，1787年〕。自由な高利が資本主義的生産の要素として承認される。」（『1861-1863年草稿』，MEGA, II/3.4, S.1533-1534.）

マルクスはまた，産業資本のこの闘いが進められた歴史的過程を，当時のイデオローグである経済学者たちの論戦を通じて，次のように明らかにしている。

「「トマス・カルペパー（1641年）やジョサイア・チャイルド（1670年）やパタースン（1694年）によれば，富は，強制的にであろうと金銀の利子率が引き下げられることにかかっている。〔この見解は〕イギリスではほとんど2世紀にわたって採用されてきた。」（ガニル。）

ヒュームが，ロックに反対して，利潤率によって利子率が規定されると主張したとき，彼はすでに，資本がはるかに大きく発展しているのを目撃していたのであり，また，ベンサムが18世紀の終りごろ，彼の高利擁護論を書いたとき〔1787年〕には，資本はさらにそれ以上に発展していた。ヘンリ8世からアンにいたるまで，利子率が法律で引き下げられた。」[18]（『1861-1863年草稿』，MEGA, II/3.4, S.1537.）

「17世紀にブルジョア経済学者たち（チャイルド，カルペパ，等々）が剰余価値の自立的形態としての利子に反対した論難は，ただ，古風な高利貸，当時の貨幣財産の独占者にたいする新興産業ブルジョアジーの闘争でしかない。利子生み資本はここではまだ資本の大洪水以前的な一形態であって，この形態がまず産業資本に従属させられなければならず，またそれによって，この資本が資本主義的生産の土台の上で理論的かつ実際的に占めなければならない従属的な地位を与えられなければならないのである。ブルジョアジーは，既存の伝来の生産諸関係を自己自身の生産諸関係に適合させることが必要となったときには，ほかの場合にもそうだったように，この場合にも国家の助けを借りることをためらわなかった。」（『1861-1863年草稿』，MEGA, II/3.4, S.1465.）

「18世紀の全体をつうじて，オランダにならって，利子生み資本を商業資本と産業資本に従属させてその逆にはならないようにするために，利子率の強力的な引下げを求める叫びが響いた（そして立法はこの趣旨で行動した）。主唱者として〔立っていたのは〕，標準的なイギリス（個人）銀行業の父，サー・ジョサイア・チャイルド〔だった〕。彼は，モウジズ・アンド・サン商会が「個人裁縫業者」の独占にたいする攻撃者として叫ぶのとまつたく同様に，高利貸の独占に反対を宣言する。」（MEGA, II/4.2, S.645-655；前稿（上），209-210ページ。）

18)　この文章は「経済学批判要綱」から取られたものである（MEGA, II/1.2, S. 718)。

しかし，国家の力を借りて法律によって利子率を強力的に引き下げるというのは，「資本主義的生産の最も未発展な段階に属する形態」であった。マルクスは『1861-1863年草稿』で次のように書いている。

「これらのより古い諸形態〔すなわち商業的形態および利子形態〕を産業資本はそれの形成の時期およびそれの成立の時期に眼前に見いだす。産業資本はそれらを前提として見いだすのであるが，しかし，産業資本自身によって措定された諸前提として見いだすのでも，産業資本自身の生活過程の諸形態として見いだすのでもない。それは，産業資本が最初に商品を眼前に見いだすとき，自己自身の生産物として見いだすのではなく，また，貨幣流通を見いだすとき，自己自身の再生産の一契機として見いだすのでもないのと同様である。もし資本主義的生産がその諸形態において十分に発展しており，支配的な生産様式であるならば，利子生み資本は産業資本によって支配されており，商業資本は，ただ産業資本自身の，流通過程から派生した姿でしかない。だが，自立的な諸形態としては，どちらもまずもって制圧され，産業資本に従属させられなければならない。利子生み資本にたいしては利子率の強力的な引き下げという仕方で権力（国家）が用いられ，その結果，利子生み資本はもはや産業資本に条件を課することができなくなる。だが，これは，資本主義的生産の最も未発展な段階に属する一形態である。」（『1861-1863年草稿』，MEGA，II/3.4，S.1465-1466.）

産業資本が，国家の力を利用して利子率を強力的に引き下げ，利子生み資本を従属させる過程は，同時に資本主義的生産が確立されていく過程でもあった。

「資本主義的生産が確立されれば，旧来の生産様式の存続と結びついていた，剰余労働にたいする高利の支配はすでになくなっている。産業資本家は直接に剰余を利潤として収得する。彼はまたすでに生産諸条件をも一部分はわがものにしていて，年々の蓄積の一部分は直接

に彼によって取得される。この瞬間から，ことに産業的財産および商業的財産が発展するようになると，高利貸すなわち利子付き貸付業者は，たんに，分業によって産業資本家から分離されてはいるが産業資本に従属する人格となる。」(『1861-1863年草稿』，MEGA，II/3.4，1532.)

(10) 利子生み資本の包摂のための信用制度の創造

しかし，「高利にたいするこの激しい攻撃――あるいは利子生み資本の産業資本への従属――は，資本主義的生産様式のこれらの条件をつくりだす有機的創造物の，〔すなわち〕近代的銀行制度の先駆でしかない」(MEGA, II/4.2, S.655；前稿（上），212ページ）のであった。「利子率の強力的な引き下げは，まだ産業資本自身が以前の生産様式の諸方法から借りてくる形態であって，産業資本が強くなって自己の地歩を勝ち取ってしまうようになれば，産業資本はこの形態を無益で不都合なものとして捨て去る」(『1861-1863年草稿』，MEGA, II/3.4, S.1466）のである。そして，それに代わって現われたのが，「産業資本が利子生み資本を自己に従属させるほんとうのやり方」である，「産業資本に特有な形態――信用システム――の創造」であった。

「貨幣資本が高利というそれの古風な構造を保持しているあいだは，利子率が法律によって強制的に圧し下げられる。信用の形態――この形態では社会のすべての潜在的な貨幣資本が産業的生産に役立てられることになる――が創造されれば，すなわち，貨幣資本が商品となって競争のもとに置かれるようになれば，貨幣資本を産業資本に従属させて産業資本のたんなる一形態，一契機に引き下げるための強制的な方法はなくなる。」(『1861-1863年草稿』，MEGA, II/3.5, S.1547.)

「産業資本が利子生み資本を自己に従属させるほんとうのやり方は，産業資本に特有な形態――信用システム――の創造である。……信用

システムは産業資本自身の創造物であり，それ自身産業資本の一形態であって，それはマニュファクチュアとともに始まり，大工業とともにさらに仕上げられる。」(『1861-1863年草稿』，MEGA, II/3.4, S. 1466.)

産業資本が信用制度を創造しようとする試みは，高利にたいする「論戦〔Polemik〕」のかたちで開始され，高利との闘いとして展開されたのであって，この論戦の目的が，「利子生み資本を，一般に貸付可能な生産手段を，資本主義的生産様式の諸条件の一つとしてこの生産様式に従属させるということ」にあった，というかぎりでは，利子率の強制的引き下げのための闘いの段階と同一であった。

「信用システムは，もともとは，古風な高利貸（イギリスの金匠，ユダヤ人，ロンバルディア人，等々）に対する論戦的形態である。17世紀に信用システムの最初のもろもろの秘密を論述している諸著書は，すべてこの論戦的形態で書かれている。」(『1861-1863年草稿』，MEGA, II/3.4, S.1466.)

「イギリスの近代的信用制度の形成に理論的に随伴しそれを促進する著述の現実の内容によって見れば，そこに見いだされるものは，利子生み資本を，一般に貸付可能な生産手段を，資本主義的生産様式の諸条件の一つとしてこの生産様式に従属させるということにほかならないであろう。」(MEGA, II/4.2, S.660；前稿（上），219ページ。)

それではマルクスは，いったい，国家権力を利用した利子率の強力的な引き下げとは異なる，どのような歴史的過程を，「産業資本に特有な形態」である信用制度の創造によって「産業資本が利子生み資本を自己に従属させる」と考えていたのだろうか。率直に言って，マルクス自身は，このことをはっきりと読み取ることができるような記述を，この「6)」でも，またそのほかのどこでも書いていない。この「6)」のなかでマルクスが，イングランド銀行創立以前の信用制度創造の歴史的過程について具体的に述べているのは，信用制度を創造しようとするもろもろの試みについての引

用やコメントを除けば，次に引用するものがそのすべてである。

「イタリアの諸都市でのように，商業が――とくに海外貿易が――発展しているところでは，早期に信用制度〔が発展した〕。オランダではそうだった。信用制度はどこでも，海外貿易および海外市場の発展に比例して発展したと言いうる。この場合には，利子は利潤によって規制される。(ヴェネツィア，ジェノヴァ，バルセロナ等々，のちにはオランダでの諸銀行の設立は度外視して。)「ヴェネツィアによって与えられた実例はこうして急速に模倣された。すべての沿海都市が，また一般に，その独立とその商業とによって名をなしていたすべての都市が，その最初の銀行を設立した。これらの都市の船が帰ってくるまでには長く待たされることが多かったので，不可避的に信用授与の習慣が生まれ，アメリカの発見とそれに伴う対アメリカ貿易はこの習慣をいっそう強固にした。〔」〕{これは一つの主要点である。}〔「〕積み荷には多額の前貸が必要とされたが，これはすでにかつてアテネやギリシアで見られたことである。1308年にはハンザ都市ブリュージュは一つの保険施設をもっていた。」(M. オジエ，同前〔『公信用について』，パリ，1842年〕，202，203ページ。)」(MEGA，II/4.2，S.658；前稿（上)，197-198ページ。)

「12世紀および14世紀にヴェネツィアやジェノヴァでつくられた信用組合は，昔ながらの高利の支配や貨幣取引の独占から解放されようとする海上貿易の諸要求とそれに基礎を置く卸売商業との要求から生まれたものである。これらの都市共和国に設けられた本来の銀行は同時にまた公信用のための（徴取予定の租税を担保として国家に前貸をするための）施設として現われたのであるが，これについて忘れてならないのは，かの商人組合は，それら自身これらの国の中心人物であり，そのさい，自分たち自身と同じく自分たちの政府をも高利から解放する｛またそれによって同時に国家機構〔Staatswesen〕を自分たちに従属させる｝ことに関心をもっていた，ということである。」

(MEGA, II/4.2, S.654；前稿（上），206-207ページ。)

「アムステルダム銀行（1609年）は（ハンブルク銀行1619年と同じく），近代の信用制度の発展のなかで一時期を画するものではない。〔それは〕純粋な預金銀行〔だった〕。この銀行が発行した手形は実際にはただ預託された貴金属（または硬貨）の受領証でしかなく，それがただその受取人の裏書きによって流通しただけだった。しかし，オランダでは商業や製造工業といっしょに商業信用や貨幣取扱業が発展したのであって，利子生み資本は発展そのものによって産業資本や商業資本に従属させられていた。このことは利子率の低いことにも現われていた（量的に）。しかし，オランダは17世紀には，ちょうど今日のイギリスのように，経済的発展の模範国として認められていた。貧窮を基盤とした古風な高利の独占は，オランダではおのずから覆えされていたのである。」(MEGA, II/4.2, S.654；前稿（上），209ページ。)

信用制度の創造にいたる歴史的過程についてのマルクスのこれらのわずかの素描では，次のことを確認しないわけにはいかない。第1に，ここでは，初期の信用諸機関が，海外貿易とそれを基礎とする商業とが高利の支配とそれによる貨幣取扱業の独占とから解放されようとする要求から生まれた，と述べている。つまり，高利貸に対抗して，それから独立した貨幣取扱業のための諸施設を設ける動因となったのは，国内商工業の発展ではなく，遠隔地間の貿易に携わる商業資本の発展だとされている。第2に，ここで挙げられているそうした信用諸機関――「12世紀および14世紀にヴェネツィアやジェノヴァでつくられた信用組合」，「都市共和国に設けられた本来の銀行」，商業が発展しているところで早期に発展した「信用制度」，「独立とその商業とによって名をなしていたすべての都市」が設立した「最初の諸銀行」，「1308年にハンザ都市ブリュージュ」がもった「保険施設」，「アムステルダム銀行（1609年）」，「ハンブルク銀行1619年」――は，ひとつの例外もなくすべて貨幣取扱を行なう信用機関である。第3

に，そのうちの「都市共和国に設けられた本来の銀行」については，それが「公信用のための施設」でもあったことが特記されており，公信用が信用制度の成立過程で重要な意味をもっていたことが示唆されている。第4に，最後の引用で，イギリスではなくオランダについて，「商業や製造工業といっしょに商業信用や貨幣取扱業が発展したのであって，利子生み資本は発展そのものによって産業資本や商業資本に従属させられていた」と言い，「貧窮を基盤とした古風な高利の独占はおのずから覆えされていた」と書いているが，ここでは，これらの事実と信用制度の創造とがどのように関わっていたのかについてはまったく触れていない。最後に，これらの全体を通じて言えるのは，この「6)」で――総じてどこででも――マルクスは，産業資本が信用制度の創造によって高利資本を自己に従属させる歴史的過程について，実質的にはほとんどなにも書かなかった，ということである。

それにしても，ここでわずかに述べられている歴史的過程は，マルクスが「5)信用。架空資本」の冒頭（エンゲルス版第25章の冒頭）で述べていた，三宅義夫氏の言われる「信用制度の形成」[19]についての記述と矛盾しないであろうか。

三宅義夫氏によれば，マルクスはそこではまず，「商業信用，商業手形が信用制度，銀行券の基礎をなすとして，信用制度形成の第1の説明を述べた」[20]のであり，そのうえでマルクスが「信用制度形成のいま一つの側面として挙げているのは，貨幣取扱業（Geldhandel）の発達と結びついている側面である」[21]。三宅氏のこうした理解と軌を一にして，この箇所でのマルクスの記述を，信用制度形成の歴史的過程そのものの説明と受け止め，マルクスは信用制度の歴史的な成立過程を，なによりもまず，「意

19)　三宅義夫『マルクス信用論体系』は，第25章の冒頭で「信用制度の形成」が述べられていると言う（同書，30-42ページ）。
20)　同前，35ページ。
21)　同前。

識的に信用制度をつくりあげようとしてではなく」て「自然発生的に」起こってくる商業信用および商業手形の発達が，その限界から，自己が発行する信用貨幣によって手形割引を行なう銀行の銀行信用を呼び起こす，というところに見て，この基本的なコースの延長線上に，貨幣取扱業の発達を基礎としこれと結びついている利子生み資本の管理を行なう銀行業が成立してくるのだ，と考えていたのだ，とする論者が――このように理解されたマルクスをそのまま受けとめる論者から「このように考えるマルクスは史実を知らなかったのだ」としてマルクスを批判する論者までさまざまだが――きわめて広く見受けられる。こうした理解に立てば，上に見た「6)」でのマルクスの記述はまったく不完全であるだけでなく，第25章冒頭部分での記述とはまったく矛盾することを述べていることになるであろう。

このような外見上の矛盾が生じるのは，第25章冒頭部分での記述を「信用制度の形成」についての記述だと読むからである。エンゲルス版でも，ここを読むだれにでもすぐわかるように，マルクスはそこで「二つの側面」について語っている。しかしそれは，「信用制度形成の二つの側面」なのではなく，信用制度そのものの二つの側面なのである。第1は「信用の取扱い」という側面――これを「信用貨幣の創造」と読むのは，完全には正確ではないが，ポイントを突いてはいる――であり，第2は「利子生み資本の管理」という側面である。マルクスはここで，発展した信用制度(Kreditwesen) を分析して信用制度がもつこれら二つの側面を取り出し，それらをすでに獲得されている理論的概念――すなわち支払手段としての貨幣の機能に含まれる掛売買における「信用」および「貨幣取扱業」とこれに携わる「貨幣取扱資本」――にもとづいて展開しているのである。これを「信用制度の形成」と呼ぶことができるとすれば，それは，たとえば『資本論』第1部第2篇での「貨幣の資本への転化」を「資本の形成」と呼ぶことができるのと同じ意味で，すなわち理論的展開の過程での新たな概念の獲得という意味でしかない。いわんや，ここに信用制度形成の歴史的

過程についての説明を見るとすれば，それは――第1部第2篇の「貨幣の資本の転化」を資本形成の歴史的過程として読むのと同様に――まったくの見当違いと言うほかはない。

前節の「5)信用。架空資本」で，とりわけその冒頭の部分[22]（エンゲルス版第25章の冒頭部分）が理論的に明らかにしたのは，信用制度がどのようなものであるか，ということであり，より一般的に表現すれば，そこでは，資本の過程から生じてくる具体的形態としての信用制度が資本の一般的概念から理論的に展開されていたのである。

これまでのいくつかの拙稿のなかですでに見てきたように，「信用制度〔Kreditwesen〕」は，「信用・銀行制度〔Kredit- und Bankwesen〕」とも言い表わされるように，銀行という独自の資本主義的組織を中核とする，利子生み資本の集中・媒介・配分のための機構であり，約言すれば利子生み資本を管理する社会的機構である。それは，「貨幣システム〔Monetarsystem＝Geldsystem〕」を土台として成立する「信用システム〔Kreditsystem〕」（信用が貨幣に代位するシステム）の基礎的構成部分である商業信用とともにこの信用システムを構成し，この信用システムの上層的構成部分をなしている。これに対応して，利子生み資本の管理を本来の業務とする銀行は，信用システムの構成部分としては，同時に，信用を取扱う信用機関でもある[23]。「5)信用。架空資本」の冒頭部分では，このような信用制度を分析して，まず，信用の取扱いという側面を，支払手段としての貨幣の機能に含まれる信用とそれの発展した形態である商業信用というそれの基礎から展開し，次に，利子生み資本の管理という側面を，貨幣取扱業と貨幣取扱資本というそれの基礎から展開している。しかし，そのな

---

22)　MEGA, II/4.2, S. 469-475；拙稿「「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章）の草稿について（中)」，『経済志林』第51巻第3号，1983年，4-30ページ，参照。

23)　信用システムおよび信用制度の意味については，とりあえず，拙稿「「貨幣資本と現実資本」(『資本論』第3部第30-31章）の草稿について」，『経済志林』第64巻第4号，1997年，118-130ページを見られたい。また，拙著『社会経済学』，桜井書店，2001年，355-362ページを参照されたい。

かで明らかにされるのは，信用・銀行制度とは本質的に利子生み資本管理の社会的機構であって，このようなものとしてはまさに貨幣取扱業という土台から発生してきたものであり，この土台の上に意識的，「人工的」に形成されたものだ，ということである。

ここから出てくるのは，歴史のなかでも，信用制度の歴史的形成の直接の前提をなすのはなにをおいても貨幣取扱業の発展だということである。

言うまでもなく，貨幣取扱業の発展は商品取扱業の発展なしにはありえないのであり，商品取扱業の発展は貨幣の諸機能，したがってまた支払手段としての貨幣の機能の展開なしにはありえない。だから，そのかぎりでは，貨幣取扱業の発展は理論的には商品取扱資本のもとでの信用関係，すなわち商業信用の発展を前提するものである。

けれども，現実の歴史過程は，まず貨幣の諸機能だけが全面的に発展し，続いて産業資本が全面的に発展し，そのあとではじめて，産業資本の第2次的形態である商業資本（商品取扱資本）が発展し，産業資本と商品取扱資本との発展のあとで，それらの貨幣取扱の業務を専門的に引き受ける貨幣取扱資本が発展し，そしてそれらのあとにはじめて利子生み資本が生まれてくる，という順序で進行したのではけっしてない。むしろ，生産物の商品への転化とほとんど同時に貨幣が生成し，この貨幣が媒介する商品流通が行なわれるようになるのとほとんど同時に商業活動が生まれ，遠隔地間の商品取扱すなわち海外貿易が貨幣取扱業を生みだしたのであり，また他方で，貨幣が生成するとほとんど同時に貨幣蓄蔵が行なわれ，貨幣蓄蔵者のなかから高利貸が生まれてくるのである。これらは，生産者や商人のあいだでの信用取引，つまり商業信用の広範な発展を前提するものではけっしてない。むしろ，「高利は，それのブルジョア化された，すなわち資本に適合させられた形態では，それ自身信用の一形態であるけれども，それの前ブルジョア的形態では，むしろ信用の欠如の表現である」（「経済学批判要綱」，MEGA, II/1.2, S.434）のであって，高利の支配は商業信用の展開と対立するものである。さらに，これらのものの発展のす

べてが，歴史的には，産業資本の確立に先行するものである。こうしたことを考えれば，理論的展開における諸範疇の順序と歴史的過程のなかで諸範疇が支配的なものとして現われる順序とが同一でないことはわかるはずである。

マルクスは「経済学批判」の「序説」で次のように書いている。

> 「経済的諸範疇を，歴史的にそれらが規定的な範疇であった順序で配列することは，できもしないし，まちがってもいる。諸範疇の順序は，むしろ，それらが近代ブルジョア社会のなかで互いにもっている連関によって規定されているのであって，この連関は，諸範疇の自然的順序として現われるものや歴史的発展の順序に対応するものとはまさに逆のものである。ここでの問題は，経済的諸関係がさまざまな社会形態の継起のうちで歴史的に占める関係ではない。……そうではなくて，問題なのは，近代ブルジョア社会の内部での経済的諸関係の編制なのである。」(「経済学批判要綱への序説」，MEGA, II/1.1, S. 42.)

まず，商業信用・商業手形・信用貨幣という信用制度の本来の基礎を論じ，次に，貨幣取扱業という信用制度の土台を論じたうえで，利子生み資本の管理を本来の業務とする信用・銀行制度の全体を論じる，という「5)信用。架空資本」の冒頭部分での諸範疇の順序は，「歴史的にそれらが規定的な範疇であった順序」を示すものではない。

これにたいして，「6)前ブルジョア的諸関係」で考察されるのは，資本主義的生産様式の歴史的な生成のさいに，産業資本がどのような過程を経て利子生み資本を自己のもとに包摂するに至ったのか，ということであり，そのなかでは諸範疇はまさに「歴史的発展の順序」で現われるはずのところなのである。

このような方法的見地を念頭において，わずかなものであるが，上に挙げたマルクスの記述を読めば，マルクスが，イングランド銀行設立以前の信用制度前史の濫觴を，ヨーロッパ各地での海外貿易の発展とそれに携わ

る商品取扱資本の発展とがもたらした，貨幣取扱業務を専門的に引き受ける信用諸機関の設立に見ていたことがわかる。『資本論』第3部エンゲルス版の第19章「貨幣取扱資本」[24]で述べられているように，「近代的貨幣取扱業の自然発生的な基礎」[25]となった「貨幣取扱業の最も本源的な形態」[26]は両替業と地金取扱業であった。マルクスは，この「本源的形態」から出発した貨幣取扱業が「完全に発展した」形態になる質的な転機について，「これはすでに貨幣取扱業の発端からあったことではあるが」と断わり書きを挿入しながら，「貸借の機能や信用取扱が貨幣取扱業のそのほかの機能と結びついたとき，貨幣取扱業は完全に発展しているわけである」と言い，これについては「次章」すなわち利子生み資本を論じる第5章で論じると書いていた。この「完全に発展した」形態での貨幣取扱の業務が，信用制度のもとでの銀行の行なう貨幣取扱業務であることは言うまでもない。マルクスは，信用制度形成にいたる歴史的過程の本筋を，まさにこの「貨幣取扱業の最も本源的な形態」を営む「信用施設」から「預金銀行」を経てイングランド銀行が設立されるにいたる，貨幣取扱業の発展に見ていたのである。

そうだとすると，「5)信用。架空資本」の冒頭で，信用制度の一方の側面である信用の取扱いの基礎として述べられていた商業信用の発展は，信用制度の形成にどのような意味をもったのであろうか。マルクスは上の引用に見られるように，貨幣取扱業の発展を経て信用制度が形成されてきた筋道にたいして，ただそれに伴うだけであるかのように，「商業や製造工業といっしょに商業信用や貨幣取扱業が発展」して，「利子生み資本は発展そのものによって産業資本や商業資本に従属させられる」事実を指摘してはいた。しかし，ここでは彼は，生産者や商人のもとでの商業信用の発

24) 拙稿「「貨幣取扱資本」(『資本論』第3部第19章）の草稿について」，『経済志林』第50巻第3・4号，1983年，参照。
25) 同前，(288)ページ。
26) 同前，(293)ページ。

展が，商業手形に置き換わる，商業手形よりも一般的に流通する信用貨幣としての銀行券を求めることから，言い換えれば手形割引への要求から銀行が，信用制度が生みだされた，などと読むことが可能な記述をいっさいしていない。これは当然のことである。貨幣取扱業の発展の長い歴史的経過を経て生まれてきた預金銀行が，手形割引によって，商業手形を自己の発行する手形＝銀行券＝信用貨幣と置き換えたときに，はじめて，一方での利子生み資本の管理の機能と他方での信用取扱の機能とが結びつき，信用・銀行制度が成立するのだからである。商業信用の発展が貨幣信用（いわゆる「銀行信用」）を要求した結果として銀行制度が生まれたのではけっしてない。マルクスの上の引用での記述はこのことを示唆している。

しかしそれにしても，信用制度形成史についてのここ「6)」での具体的な記述が，マルクスもよく知っていたであろう膨大な歴史的事実のうちから，注目すべき筋道にかかわるものとして彼が拾い上げたきわめて限られたものでしかなかったし，総じてここでの記述も草稿性がきわめて高いものであることに十分留意すべきであろう。

産業資本が信用制度の創造によって利子生み資本を自己のもとに従属させる歴史的過程のなかで，マルクスが決定的な「一時期を画する」ものと見ていたのが，イングランド銀行の創立であることは疑いない。しかしマルクスはこの「6)」では，イングランド銀行の設立については，これをめぐる諸見解について触れているだけで，それの歴史的経緯についてもその画期的意義についても，なにひとつ書いていない。

このように，利子生み資本にかんする歴史的考察を行なったこの「6)」のなかで，信用制度創造の歴史的過程についてきわめてわずかなことしか述べていないのは，「5)信用。架空資本」の冒頭で，「信用制度とそれが自分のためにつくりだす，信用貨幣などのような諸用具との分析は，われわれの計画の範囲外にある」と述べて，この「5)」での対象を限定していたことに対応するものであろう。「5)」で信用制度のもとでの利子生み資本を考察したのちにも，マルクスが依然として，「信用制度の分析はわれわ

れの計画の範囲外」と考えていたことがこの「6)」からも伺われるのである[27)]。

(11) 信用制度の歴史的意義

さて,「6)前ブルジョア的諸関係」では，前項で見たように，信用制度の創造によって，利子生み資本が産業資本に従属し，自立的な資本形態から産業資本の派生的形態に転化していく歴史的過程が――まったく素描的なかたちではあるが――考察された。

これによって，利子生み資本のみならず，それの管理機構として産業資本が創造した信用制度についても，それの理論的概念だけでなくそれの歴史的生成の過程も明らかにされたということになるわけである。

そこでマルクスはさらに進んで,「資本主義的生産様式の内在的形態」(MEGA, II/4.2, S.661；前稿（上)，223ページ）であるこの信用制度の歴史的意義について述べる。すでに見たように，理論的展開ののちに行なわれるべき歴史的考察では，資本（およびそれの諸形態）の成立の歴史的諸前提が示されるだけではなくて，そこではまた「今日の生産諸条件が，自己自身を止揚する諸条件として，それゆえまた，新たな社会状態のための歴史的な諸前提を措定する諸条件として現われる」のであって，このことがいまここで，利子生み資本および信用制度について行なわれているのである。

しかし，マルクスはすでに「5)信用。架空資本」のなかで，信用制度が

27) 付言すれば,『1861-1863年草稿』のうちのノート第17冊（1862年執筆）では,「この点については信用としての資本にかんする項目〔Abschnitt〕ではじめて詳細に立ち入ることができる」(MEGA, II/3.5, S. 1701）と言い，また,「この運動がそれ以上にどのように媒介されるかは，そもそも，信用制度ではじめて展開されるべきことである」(MEGA, II/3.5, S. 1737）と言って，資本の一般的分析ののちに信用制度にかんする研究を予定していることを明記していた。「5)」の冒頭での上の言明は，第3部第1稿の第5章を執筆していた1865年の時点でも依然として「信用制度の分析」が「資本の一般的分析」の外部に属する「項目」とされていたことを明らかにしているものなのである。

どのようなものであるかを明らかにしたのちに，エンゲルス版第27章にまとめられた部分で，資本主義的生産における信用の役割について書いていた[28]。そこでは，明らかに，信用制度が「新たな社会状態のための歴史的な諸前提を措定する諸条件」として果たす役割についても述べられていた。このエンゲルス版第27章部分での記述と「6)」(エンゲルス版第35章)での記述との関係はどのようなものであろうか。

それは，第27章部分では，信用制度が資本主義的生産の内部で果たす役割が，資本の諸形態の理論的展開に即して論じられるのにたいして，ここ「6)」では，信用制度が歴史のなかで果たす役割，歴史のなかでそれがもつ意義が，したがってまた資本主義的生産そのものが信用制度を通じて歴史のなかで果たす役割・意義が論じられている，という違いである。信用制度の意義・役割を論じているという点では，両者は共通であるが，前者ではそれが，資本主義的生産の内部で，資本主義的生産にとってどのような役割を果たすのか，という観点から見られ，後者ではそれが，資本主義的生産そのものの止揚の諸前提を生みだすのにどのような役割を果たすのか，という観点から見られている，という違いである。

もちろん，後者は前者を全面的に前提するものであり，前者は当然に後者を内在しているものであるから，両者の叙述は大きく重なりあい，補足しあうことになる。マルクスの叙述も，見たところでは，たんなる繰り返しであり，「再論」[29]のように見えるかもしれない。しかし，前者が理論的展開の一部をなすものであり，後者が歴史的考察の一部をなすものである，というところに，両者の課題の違いがあると考えるべきであろう。

そこで，マルクスが歴史的考察のなかで述べた信用制度の歴史的意義を見ておこう。

---

28)　拙稿「「資本主義的生産における信用の役割」(『資本論』第3部第27章)の草稿について」，『経済志林』第52巻第3・4号，1985年，参照。

29)　関口尚志氏による第36章の「原典解説」，『資本論体系』⑥「利子・信用」，有斐閣，1985年，199ページ。

マルクスはまず，近代的銀行制度について，次のように言う。

「高利にたいするこの激しい攻撃――あるいは利子生み資本の産業資本への従属〔――〕は，資本主義的生産様式のこれらの条件をつくりだす有機的創造物の，〔すなわち〕近代的銀行制度の，先駆でしかないのであって，この銀行制度は，一方ではすべての死蔵されている貨幣準備を集中してそれを貨幣市場に投じることによって高利資本からその独占を奪い取り，他方では信用貨幣の創造によって貴金属そのものの独占を制限するのである。」(MEGA, II/4.2, S.655；前稿(上)，212ページ。)

信用制度の創造が，「産業資本が利子生み資本を自己に従属させるほんとうのやり方」である，ということの核心が，この文章の後半で言われている。

一方では，産業資本は高利資本のもとに集積された貨幣財産を自己のもとで生産的に前貸しできるようにするために，高利資本を自己のもとに従属させようとするが，そのために創造した信用制度では，遊休している貨幣と貨幣資本とが銀行のもとに集中し，それが貨幣市場に媒介されて，必要に応じて生産的資本（産業資本および商業資本）に配分されるようになる。こうして，高利資本から貨幣と貨幣資本との独占が奪い取られることになる。

他方では，この信用制度は，生産者や商人たちのあいだの商業信用を自己の「本来の基礎」としてその上に発展するのであって，信用システムの上層的構成部分をなしているが，信用制度とこの「基礎」とを結びつけるものが信用制度による「信用貨幣の創造」であり，これによって，本来の貨幣である貴金属の独占が制限され，生産的資本が高利資本から完全に解放されるのである。

信用制度についてのこの二つの記述は，言うまでもなく，資本主義的生産様式からいわば振り返って後方に見た場合の信用制度の歴史的意義を述べたものである。エンゲルス版第27章「資本主義的生産における信用の役

割」では，当然のことながら，前資本主義的生産様式のもとでの高利資本にたいする信用制度のこうした歴史的意義は述べられていない。そこでの「II)流通費の節減」[30]では，ここでの後者の点にかかわることが書かれているが，そのすべてが，資本主義的生産様式そのものの内部で資本の運動にとって信用制度が果たす役割にかかわるものである。

続いてマルクスは，資本主義的生産様式の内在的形態である信用制度がもつそれの本質的な歴史的限界を示したうえで，この限界の内部で信用制度が資本主義的生産様式の発展をとことんにまで推し進めるとともに，すでにこの限界の内部で資本の私的性格を止揚していることを述べている。

マルクスはまず言う。

> 「けっして忘れてはならないのは，第1には，相変わらず貨幣（貴金属の形態での）が基盤であって，信用制度は事柄の性質上この基盤からけっして離脱することができないということである。第2には，信用制度は私人の手による社会的生産手段（資本や土地所有の形態での）の独占を前提するということであり，信用制度はそれ自身資本主義的生産様式の内在的形態であるとともに他方ではこの生産様式をその可能なかぎりの最終の形態まで発展させる一つの媒体だということである。」(MEGA, II/4.2, S.661；前稿（上），223ページ。)

信用制度が「資本主義的生産様式の内在的形態」であって，それがけっして資本主義生産様式の限界を越えることができないのは，第1にそれが，資本主義的生産様式がけっして離れることができない「貨幣システム〔Monetarsystem〕」という土台のうえに成り立っている「信用システム」の一部だからであり，第2にそれが，高利資本から奪い取った「社会的生産手段（資本や土地所有の形態での)」を，労働する諸個人から完全に分離された状態に置くことを，言い換えれば，貨幣が資本として機能することができる諸条件があることを前提しているのだからである。信用制度の

30)　前出拙稿「「資本主義的生産における信用の役割」の草稿について」，(30)-(31)ページ。

歴史的限界についてのここでの二つの指摘が，さきに見た信用制度の歴史的意義についての二つの指摘に完全に対応していることが読みとれるであろう。

信用制度はこのような限界をもっているので，信用制度はそれ自体としては資本主義的生産様式にその限界をのりさせることはできず，それに可能なのは，ただ，「生産様式をその可能なかぎりの最終の形態まで発展させる一つの媒体」となることだけだ，ということになるのである。

そのうえでマルクスは，いよいよ，三つのパラグラフにわたって信用制度の歴史的意義を書くことになる。このうちの二番目のパラグラフは，一番目のパラグラフでの記述に関連することをあとから書き加えたものだから，まず，一番目と三番目のパラグラフを見よう。かなり長い一番目のパラグラフは，次のように書きだされている。

> 「銀行システムは，形態的な組織や集中という点から見れば，およそ資本主義的生産様式がつくりだす最も人工的な最も完成した産物である。それだからこそ，イングランド銀行のような機関が商業や産業の上に巨大な力を揮うのである。といっても，商業や産業の現実の運動はまったくこのような機関の領域の外にあるのであって，この運動にたいしてこのような機関はまったく受動的な関係にあるのであるが。それとともに，たしかに社会的な規模での生産手段の一般的な簿記や配分の形態は与えられているのではあるが，しかしまた，ただ形態だけである。」(MEGA, II/4.2, S.661；前稿（上），223-224ページ。)

ここでマルクスはまず，「銀行システムは，形態的な組織や集中という点から見れば，およそ資本主義的生産様式がつくりだす最も人工的な最も完成した産物である」と書きだしている。そして，そのような「形態的な組織や集中という点から見て最も人工的な最も完成した産物」だからこそ，「イングランド銀行のような機関が商業や産業にたいしてもつ巨大な力」をもつのだが，といってもイングランド銀行がそのような力を振るう

のは,「商業や産業の現実の運動はまったくイングランド銀行の領域外にある」のだから,これらの運動にたいして「受動的」な仕方で関わる,という限界のなかでなのだ,と言う。しかし,それにしても,商業や産業に巨大な力を振るうことができる「形態的な組織や集中という点から見て最も人工的な最も完成した産物」が生まれたことによって,人類史のなかで人間ははじめて,「ただ形態だけ」ではあるけれども,「社会的な規模での生産手段の一般的な簿記や配分の形態」をもつことになったわけである。以上のところで述べられたのは,まさに,信用制度がもつ巨大な歴史的意義である。

続いて,信用制度とともに与えられる「社会的な規模での生産手段の一般的な簿記や配分の形態」の具体的な内容として,利潤率の均等化を媒介し実現する信用制度の働きが挙げられる。

> 「すでに見たように,個々の資本家の,特殊的資本の平均利潤は,それが搾取する剰余労働によって規定されているのではなく,総資本が搾取する社会的剰余労働の量によって規定されているのであって,そのなかから特殊的資本はただ自己が総資本のなかで占める割合に応じてのみ自己の分け前を引き出すのである。このような,資本の「社会的な」性格は,信用・銀行システムの発展によってはじめて媒介され実現されるのである。」(MEGA, II/4.2, S.661;前稿(上),224ページ。)

これは,言うまでもなく,エンゲルス版第27章部分の冒頭で,「I)利潤率の均等化を媒介するために,すなわち全資本主義的生産の基礎をなすこの均等化の運動を媒介するために,信用制度が必然的に形成されること」[31],と書いていたのに対応するものである。しかし,見落としてはならないのは,そこでは資本主義的生産様式にとって信用制度が果たす役割,信用制度のもつ意味が問題となっていたのにたいして,ここでは,

31)　同前,(30)ページ。

「資本の「社会的な」性格」を媒介し実現する，ということがポイントとなっているということである。信用制度による利潤率の均等化の媒介は，ここでは，資本という転倒的な主体に即しての「社会性」という限界のなかでではあれ，資本主義的生産がもたざるをえない「社会的」性格を媒介し実現するものとしてとらえられている。資本主義的生産がこうした「社会的」性格をもつということは資本主義的生産様式そのものの巨大な歴史的意義である。つまり，ここでは，利潤率の均等化を媒介する信用制度の役割が，信用制度が人類史のなかでもつ歴史的意義としてとらえられているのである。

次にマルクスは，さらに進んで，信用制度が「資本の私的な性格を止揚する」こと，「即自的に資本そのものの止揚を含んでいる」ことを述べる。

「他方ではこの信用・銀行制度はさらに前進する。それは産業資本家や商業資本家に社会のあらゆる処分可能な資本を，そして現実にすでに使用されているのではない資本を用立てるのであり，したがってこの資本の貸し手もその充用者もこの資本の「所有者」でもなければ生産者でもないのである。このようにしてこの信用・銀行システムは資本の私的な性格を止揚するのであり，したがって即自的に，しかしただ即自的にのみ，資本そのものの止揚を含んでいるのである。」(MEGA, II/4.2, S.661；前稿（上），224ページ。)

すでに，「5)信用。架空資本」の冒頭部分での，信用制度の第2の側面のところで，マルクスは次のように書いていた。

「貨幣取扱業というこの土台のうえで信用制度の他方の側面が発展し，〔それに〕結びついている，――すなわち，貨幣取扱業者の特殊的機能としての，利子生み資本あるいは monied capital の管理である。貨幣の貸借が彼らの特殊的業務になる。彼らは monied capital の現実の貸し手と借り手とのあいだに媒介者としてはいってくる。一般的に表現すれば，銀行業者の業務は，一方では，貸付可能な貨幣資本を自分の手中に大規模に集中することにあり，したがって個々の貸

し手に代わって銀行業者がすべての貨幣の貸し手の代表者として再生産的資本家に相対するようになる。彼らはmonied capitalの一般的な管理者としてそれを自分の手中に集中する。他方では，彼らは，商業世界全体のために借りるということによって，すべての貸し手に対して借り手を集中する。……銀行は，一面ではmonied capitalの，貸し手の集中を表わし，他面では借り手の集中を表わしているのである。」(MEGA, II/4.2, S.471；拙稿「「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章）の草稿について（中)」,『経済志林』第51巻第3号，1983年，13ページ。)

monied capitalのこのような独自の「社会的」性格は，エンゲルス版第22章部分で――『1861-1863年草稿』での記述を引き継いで――次のようにまとめられていた。

「貨幣資本（貨幣市場での資本）は現実に次のような姿態をもっている。すなわち，その姿態で貨幣資本は共同的な要素として，その特殊的な充用にはかかわりなしに，それぞれの特殊的部面の生産上の要求に応じていろいろな部面のあいだに，資本家階級のあいだに，配分されるのである。そのうえに，大工業の発展につれてますます貨幣資本は，それが市場に現われるかぎりでは，個別的資本家，すなわち市場にある資本のあれこれの断片の所有者によって代表されるのではなくて，集中され組織されて，現実の生産とはまったく違った仕方で，社会的資本を代表する銀行業者の統制のもとに現われる。したがって需要の形態から見れば，この資本には一階級の重みが相対しており，同様に供給から見ても，この資本は，大量にまとまった〔en masse〕貸付可能な資本として〔現われる〕のである。」(MEGA, II/4.2, S.440-441；拙稿「「利潤の分割」(『資本論』第3部第22章）の草稿について」,『経済志林』第56巻第4号，1989年，31-32ページ。)

要するに，マルクスはここで，信用制度が，遊休している貨幣および貨幣資本を集中してmonied capitalを形成し，これを貨幣市場を通じて生

産的資本に配分するさいには，すでに「資本の貸し手もその充用者もこの資本の「所有者」でもなければ生産者でもない」ことを指摘して，これは信用制度が「資本の私的性格を止揚」していること，したがってまた「即自的には資本そのものの止揚を含んでいる」ことを述べているのであり，まさに，信用制度の，資本主義的生産にとっての意義を越える，人類史にとっての歴史的意義についての指摘を行なっているのである。

また，信用制度による「資本の私的性格の止揚」については，エンゲルス版第27章部分のなかの「Ⅲ)株式会社の形成」以下のところで，次のように詳論していた。長くはなるが，ここでの文脈に欠かすことができないきわめて重要な文章であるので，掲げておこう。

「Ⅲ)株式会社の形成。これによって第1に，生産規模のすざまじい拡張〔が生じ〕，そして私的諸資本には不可能な諸企業〔が生まれる〕。同時に，従来は政府企業〔だった〕ような諸企業が会社企業〔社会的企業〕になる。第2に，即自的には社会的生産様式を基礎とし，生産手段および労働力の社会的集中を前提している資本が，ここでは直接に，私的資本に対立する社会資本〔会社資本〕（直接にアソシエイトした諸個人の資本）の形態を与えられており，資本の諸企業が，私企業に対立する社会企業〔会社企業〕として〔現われる〕。それは，資本主義的生産様式そのものの諸限界の内部での，私的所有としての資本の止揚である。第3に，現実に機能している資本家が（他人の資本の）たんなるマネジャーに転化し，資本所有者はたんなる所有者，たんなる貨幣資本家〔moneyed capitalist〕に転化すること。彼らの受ける配当が利子と企業利得とに，すなわち総利潤に等しい場合でも（というのは，マネジャーの賃金は一種の熟練労働のたんなる賃金であるか，またはそうなるはずのものであって，どの種類の労働とも同様に，労働市場でしかるべき水準に落ちつくのだから），この総利潤は，もはや利子の形態で，すなわち資本所有のたんなる報酬として，受け取られるにすぎないのであって，この資本所有が現実の再

生産過程での機能から分離されることは，(マネジャーの) 機能が資本所有から分離されるのとまったく同様である。こうして，利潤は(もはや，それの一方の部分，すなわち借り手の利潤からその正当化の理由を引きだす利子だけではなく)，他人の剰余労働のたんなる取得として現われるのであるが，このことは生産手段が資本に転化することから，すなわち，生産手段が，マネジャーから最下級の賃労働者に至るまでのすべてを含む現実の生産者に対して他人の所有として疎外され，対立することから生じるのである。株式会社では機能と資本所有とが，したがってまた労働と生産手段および剰余労働の所有とが，まったく分離されている。資本主義的生産が最高に発展してもたらしたこの結果こそは，資本が生産者たちの所有に，といっても，もはや個々別々の生産者たちの私有としての所有ではなく，アソシエイトした生産者としての彼らによる所有としての所有に，直接的な社会所有としての所有に，再転化するための必然的な通過点である。それは他面では，資本所有と結びついた再生産過程上のいっさいの機能の，たんなるアソシエイトした生産者たちの機能への転化，社会的機能への転化である。……これは，資本主義的生産様式の内部での資本主義的生産様式の止揚であり，したがってまた自己自身を止揚するような矛盾であって，この矛盾は，一見して明らかに，生産様式の新たな形態へのたんなる通過点として現われるのである。それはさらに，現象においても，このような矛盾として現われる。それはある種の諸部面では独占を成立させ，したがってまた国家の干渉を誘い出す。それは，新しい金融貴族を再生産し，企業企画屋や重役（たんなる名目だけのマネジャーや）の姿を取った新しい寄生虫一味を再生産し，株式取引や株式発行等々についての思惑と詐欺との全制度を再生産する。私的所有によるコントロールのない私的生産。

株式制度を度外視しても――株式制度は資本主義的システムそのものの基礎の上での資本主義的私的産業の一つ止揚であって，それが伸

張して新たな生産部面をとらえて行くのにつれて私的産業をなくして行く——，信用は，個々の資本家または資本家とみなされている人に，他人の資本や他人の所有の（それによってまた他人の労働の）——相対的に言って——絶対的な処分権を与える。自分の資本のではなくて社会的な資本の処分権は，彼に社会的労働の処分権を与える。資本そのものまたは「資本とみなされているもの」は，もはや信用という上部建築のための土台になるだけである。（このことは，国富の大部分がその手を通る卸売業にはとくによくあてはまる。）いっさいの規範が，また，多少とも資本主義的生産様式の内部でまだ正当とされてきたもろもろの弁明理由が，ここではなくなってしまう。彼が賭けるものは，社会的所有であり，彼の所有ではない。また同様に，節約という文句もばかげたものになる。というのは，他人が彼のために節約しなければならないのだからである。また彼の奢侈が節欲という文句をあざ笑う。資本主義的生産のより未発展な段階ではまだなにか意味のある諸観念が，ここではまったく無意味になる。成功も失敗も，ここでは同時に集中に帰し，したがってまた法外きわまりない規模での収奪に帰する。収奪はここでは直接生産者から小中の資本家そのものにまで及ぶ。この収奪は資本主義的生産様式の出発点であり，この収奪の実行はこの生産様式の目標であるが，しかし最後にはすべての個々人からの生産手段の収奪〔に終わる〕。生産手段は，社会的生産の発展につれて，私的生産手段であることをも私的産業の生産物であることをもやめ，それはもはや，それがアソシエイトした生産者たちの社会的生産物であるのと同様，アソシエイトした生産者たちの手にある生産手段，したがって彼らの社会的所有物にほかならない。ところがこの収奪は，資本主義的システムそのものの内部では，対立的に，少数者による社会的所有の横奪として現われるのであり，また信用は，これらの少数者にますます純粋な山師の性格を与えるのである。所有はここでは株式の形で存在するのだから，その運動そのも

の，つまりその移転は取引所投機のまったくの結果となるのであって，そこでは小魚は鮫に呑みこまれ，羊は狼男に呑みこまれてしまう。株式制度のうちには，すでに，この形態に対する対立物があるが，しかし株式制度それ自身は，資本主義的な制限の内部で，社会的な富と私的な富という富の性格のあいだの対立を新たにつくり上げるのである。」(MEGA, II/4.2, S.502-504；拙稿「「資本主義的生産における信用の役割」(『資本論』第3部第27章）の草稿について」，(33)-(39)ページ。)

マルクスはあとから，さきのパラグラフの末尾に次の文章を書き加えた。

「銀行制度によって，資本の分配は，私的資本家や高利貸の手から，一つの特殊的業務，社会的な機能として，取り上げられている。しかしこれによって同時にそれは，資本主義的生産をそれ自身の制限を越えて進行させる最も能動的な手段となり，また恐慌や詐欺的眩惑等々の最も有効な媒体の一つとなるのである。」(MEGA, II/4.2, S.662；前稿（上)，225ページ。)

この書き加えは，信用・銀行制度が，資本の分配という社会的機能を「一つの特殊的業務として」私的な個別的諸資本から取り上げることによって，「資本主義的生産をそれ自身の制限を越えて進行させる最も能動的な手段」となり，資本主義的生産の限界を顕わにする「恐慌や詐欺的眩惑等々の最も有効な媒体の一つとなる」という歴史的意義をもっていることを強調するものとなっている。

この点についてマルクスは，エンゲルス版第27章部分の末尾では，さらに詳しく，次のように書いていた。

「信用制度が過剰生産と商業での過剰取引・過度投機との主要な槓杆として現われるとすれば，それは，ただ，その性質上弾力的な再生産過程がここでは極限まで強行されるからであり，しかも，そこまで強行されるのは，社会的資本の大きな部分がその非所有者たちによって

充用され，したがってこれらの人々が，所有者自身が機能するかぎりでは自分の私的資本の制限を小心に考えながらやるのとはまったく違ったやり方で，賭けをするからである。このことによって明らかとなるのは，資本主義的生産の対立的性格にもとづいて行なわれる資本の価値増殖は生産諸力の現実の自由な発展をある点までしか許さず，したがって実際には生産諸力の内在的な束縛，制限をなしているが，この束縛・制限は信用制度によってたえず破られる，ということにほかならない。それゆえ信用制度は生産諸力の物質的発展と世界市場の形成とを促進するのであるが，これらのものをある程度にまで——新たな生産様式の物質的土台として——つくり上げることは，資本主義的生産様式の歴史的任務である。同時に信用制度は，この矛盾の強力的爆発である諸恐慌を促進し，したがってまた旧来の生産様式の解体の諸要素を促進するのである。」(MEGA, II/4.2, S.505；拙稿「「資本主義的生産における信用の役割」(『資本論』第3部第27章）の草稿について」，(44)-(45)ページ。)

このあとマルクスは，信用・銀行制度がその上層的構成部分をなしている信用システムそのものの歴史的限界について次のように述べる。

「さらに，それ〔信用･銀行システム〕は，貨幣をさまざまの形態の流通する信用で置きかえることによって，貨幣は実際には労働とその生産物との社会的な性格の一つの特殊な表現でしかないということ，しかしこの性格は私的生産の土台に対立するものとしてつねに結局は一つの物として，他の諸商品と並ぶ特殊的商品として，現われざるをえないということを示している。」(MEGA, II/4.2, S.662；前稿(上)，225-226ページ。)

マルクスはここで，信用制度は「物」として現われている「貨幣」を「さまざまの形態の流通する信用で置きかえる」のだが，このことによって信用制度は，「一つの物として，他の諸商品と並ぶ特殊的商品として」現われているものがじつは，「私的生産に対立するのもの」としての「労

働とその生産物との社会的な性格」であることを漏らしているのだ，と言うのである。

エンゲルス版第35章部分（「貴金属と為替相場」）でマルクスは次のように書いていた。

「金銀はなにによって富の他の諸姿態から区別されるのか？　その価値の大きさによってではない。というのも，これは金銀に物質化されている労働の分量によって規定されているのだからである。そうではなくて，富の社会的な性格の自立した化身，表現として区別される。この社会的な定在は，社会的な富の現実の諸要素と並んで，その外部に，彼岸として，物として，物象として，商品として，現われるのである。」(MEGA, II/4.2, S.626；拙稿「「貴金属と為替相場」(『資本論』第3部第35章）の草稿について」，『経済志林』第69巻第3号，2001年，118ページ。)

いまここでマルクスが言っているのは，信用制度は，貨幣をさまざまの信用で置き換えることによって，「社会的な富の現実の諸要素と並んで，その外部に，彼岸として，物として，物象として，商品として，現われている」ものが，じつは富の「社会的な定在」にほかならないことを明るみに出すのだ，ということなのである。

このように信用制度は，貨幣システム（Monetarsystem）の隠された秘密である「労働とその生産物との社会的な性格」を白日のもとに曝すことによって，貨幣システム自体の，したがってまた商品生産（市場経済）の歴史的限界を示し，その止揚の必然性を示しているのである。

このあとマルクスは，観点を変えて，資本主義的生産様式からアソシエイトした生産様式に移行するさいに信用システムが強力なテコとして役立つことに触れている。

「最後に，資本主義的生産様式からアソシエイトした労働の生産様式への移行にさいして信用システムが強力な槓杆として役だつであろうということは，少しも疑う余地はない。とはいえ，それは，ただ，

この生産様式そのものの他の大きな有機的な諸変化との関連のなかで一つの契機として役だつだけである。」(MEGA, II/4.2, S.662；前稿(上)，226ページ。)

マルクスがこの時期に，資本主義的生産様式からアソシエーション的生産様式に移行するさに信用システムがどのような仕方で「強力な槓杆」として役立つと考えていたのか，ということは，その一部をエンゲルス版第27章部分での次の記述に見ることができる。

「労働者たち自身の協同組合工場は，古い形態の内部では，古い形態の最初の突破である。といっても，もちろん，それはどこでもその現実の組織では既存のシステムのあらゆる欠陥を再生産しているし，また再生産せざるをえないのではあるが。しかし，資本と労働との対立はこの協同組合工場の内部では止揚されている。たとえ，はじめはただ，労働者たちがアソシエーションとしては自分たち自身の資本家であるという形態，すなわち生産手段を自分たち自身の労働の価値増殖のために用いるという形態によってでしかないとはいえ。この工場が示しているのは，ある生産様式から，物質的生産諸力とそれに対応する社会的生産諸形態とのある発展段階で，新たなある生産様式が，自然的に形成されてくるのだ，ということである。協同組合工場は，資本主義的生産様式から生まれる工場システムがなければ発展できなかったし，また資本主義的生産様式から生じてくる信用システムがなくてもやはり発展できなかった。信用システムは，資本主義的私的企業がだんだん資本主義的株式会社に転化して行くための主要な基礎をなしているのであるが，それはまた，多かれ少なかれ国民的な規模で協同組合企業がだんだん拡張して行くための手段をも提供するのである。資本主義的株式企業も，協同組合工場と同様に，資本主義的生産様式からアソシエイトした生産様式への過渡形態とみなしてよいのであって，ただ，一方では対立が消極的に，他方では積極的に止揚されているのである。」(MEGA, II/4.2, S.504；拙稿「「資本主義的生産

における信用の役割」(『資本論』第3部第27章)の草稿について」,(39)-(40)ページ。)

以上，本項では，「6)前ブルジョア的諸関係」のなかでマルクスが信用制度の歴史的意義について述べているところをみてきた。見られるように，ここでマルクスが論じているのは，一貫して，資本主義的生産様式の内在的形態としての信用制度が人類史のなかでもっている歴史的意義，役割，任務である。この考察によって，「第5章　利子と企業利得（産業利潤または商業利潤）とへの利潤の分裂。利子生み資本」は最終的に締め括られた。つまり，この「6)」は，利子生み資本および信用制度についての歴史的考察であると同時に，利子生み資本を取り扱ってきた第5章全体の「締め括りの考察」となっているのである。

あとがき――第3部第1稿第5章の考証シリーズを終えて――

本稿で，『資本論』第3部第1稿の「第5章　利子と企業利得（産業利潤または商業利潤）とへの利潤の分裂。利子生み資本」の部分を見終わることになった。

1980年から1982年にかけて，アムステルダムの社会史国際研究所で『資本論』第2部および第3部の草稿を調査し，また1981年11月から約1か月，モスクワのマルクス＝レーニン主義研究所で第3部第1稿の解読文を閲覧した。帰国後，1982年の夏に「『資本論』第3部第1稿について」を発表したのち，1983年の春，「「貨幣取扱資本（『資本論』第3部第19章）の草稿について」を書いた。これはいわば，第3部第5章紹介の小手調べであった。同年の夏から翌1984年の冬にかけて「「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章）の草稿について」を上・中・下の三つに分けて『経済志林』に載せた。その「上」では，第1稿の第3部第5章の全体像を紹介した。これらの研究で得られたものにもとづいて1984年に「『資本論』第3部第5篇の草稿について」(『信用理論研究』第1号）および「「経済

学批判」体系プランと信用論」(『資本論体系』第6巻，有斐閣，所収）を書き，翌1985年に「「資本主義的生産における信用の役割」(『資本論』第3部第27章）の草稿について」をまとめた。こうした経緯を経たうえで，同年の夏から，第3部第1稿の第5章の紹介を含む考証的研究の発表を始めたのであった。それから本稿まで，この第5章の草稿の全体を，エンゲルス版第5篇の全16章のそれぞれの章に利用された草稿部分に分けて（そのうち「貨幣資本と実物資本」についての第30-32章を一つに，また第33章および第34章に利用された「混乱」を一つにして)，計13本の論稿を書いてきた[32)]。

第5章の考証的研究そのものはさらに続けることにしているが，草稿の翻訳をつけた拙稿のシリーズはこれで完結とする。

*　　*　　*

言うまでもなく，このシリーズの最も重要な内容は，一貫して，マルクスの草稿そのものの紹介である。第3部第1稿を収めたMEGA第2部第4巻第2分冊が1992年に刊行されるまでは，アムステルダムでフォトコピーを見るのでないかぎりこの草稿の内容を知ることはできなかったのだから，この草稿のことを知りたいと願っていた研究者にとっては，筆者の仕事は，他に代わりうるもののない，それなりの意味があったであろう。し

32) 以上に挙げたもののほか，第3部第1稿第5章にかかわる拙稿には次のものがある。

「『資本論』第3部第5篇の草稿について」，『信用理論研究』第1号，1984年7月。(1983年5月に行なった信用理論研究学会での報告をまとめたもの。)

「『資本論』における信用の役割」，『信用理論研究』第3号，1986年10月。(1985年10月に行なった信用理論研究学会での報告をまとめてもの。)

「第5篇　利子と企業者利得とへの利潤の分裂。利子生み資本」，『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第28/29号，1996年11月。(『資本論』第3部第1稿第5章のコメンタールで，1994年10月に書いたもの。)

「『資本論』第3部草稿に見るマルクスの利子生み資本論」，『大阪経済法科大学経済研究年報』第14号，1995年10月。(1995年2月に行なった大阪経済法科大学での報告をまとめたもの。)

「『資本論』の著述プランと利子・信用論」，『経済志林』第68巻第1号，2000年6月。(『資本論体系』第6巻，有斐閣，所収の「「経済学批判」体系プランと信用論」の改訂版。)

かし，1992年にMEGAのこの分冊が刊行されて，状況は変わった。この分冊を読むことができるかぎり，誰でも第3部第1稿に接することができるようになったのだからである。そのとき，筆者の仕事は，まだ第27章の部分までしか終わっておらず，第28-36章の部分がそっくり残っていた。

MEGAでの第3部第1稿の刊行は，筆者にとって，その全体を読むことができるようになったという意味では大きな喜びであったが，他面，それまで筆者が草稿によって行なってきていた仕事の不十分さが白日のもとに曝けだされることになるのではないかという不安も大きかった。そこで，入手してすぐに，第5章の部分について既発表の拙稿とのつきあわせを行なったところ，それらの拙稿が，使用に耐ええないほどの欠陥商品ではなく，MEGA版の刊行後もそれなりの意味をもちうるという確信をもつことができた。

いったんは，この時点でシリーズを中断することを考えたが，そういうこともあって，エンゲルス版との相違を注記し，筆者の若干の考証を付け加えた拙稿の発表を継続するのも無駄なことではあるまい，と思い直した。そこで，第28章以降については方式を変えて，MEGAのテキストと付属資料中の関連する記載のすべてとを翻訳し，それに筆者のノートを使った補正や注記をつけるという仕方で，作業を続けてきた。

草稿の翻訳と紹介に当たっては，一貫して，読者が草稿の状態をできるかぎり細部にわたって知ることができるように心を遣ってきた。そのためには，いろいろなところで，考証的な検討を重ねること，また草稿の内容そのものを筆者自身がよく理解することが必要だった。すべての拙稿ではないが，そのような研究の結果にもとづいて，翻訳のまえに――今回だけはあとに――筆者の解釈を含む解説めいたものを付け加えてきた。当然のことであるが，そのなかには，第3部第1稿に接してはじめて筆者がつかむことができた，第3部草稿第5章の方法，構成，記述についてのさまざまの独自の理解を盛り込むことになった。そしてそのような理解は，エンゲルス版だけによって第3部第5篇の内容を見てきた多くの論者のこれま

での理解とはあちこちで大きく異なるものを含むことにならざるをえなかった。その結果，拙稿のそのような「まえおき」やそれらを利用して書いてきた第3部第5章についての論稿は，従来の「通説」とみなされてきたものにたいして，多くの点でかなりの異説を対置することになった。

そういうこともあって，拙稿をまとめて書物の形態にすることを慫慂してくださる読者も少なくない。しかし，第1に，初めは筆者のノートによって草稿そのものの紹介を行なっていたのを，途中からMEGAの翻訳を基本にして紹介する仕方に変更したために，草稿の紹介の部分だけをまとめるとしても，毎回のものをそのままいっしょにすればいいというわけにはいかない。少なくとも，第21-27章の部分については，それ以降の部分と同じく，テキストをMEGAの――付属資料の部分を含む――翻訳に変更する必要がある。これには相当の作業が必要で，いまのところすぐに手をつけるつもりはない。第2に，「まえおき」で書いてきた筆者の見解の部分を独立にまとめることを勧めてくださる方もあるが，これまた容易なことではない。そういうことができるような仕方で書いてこなかったためにまったく不統一であるだけでなく，技術的なことのほかにはほとんどなにも書かなかったときも多かったからである。いまそうした部分をまとめるとすれば，ほとんど書き下ろしに近いものとならざるをえないであろう。ほかに片づけてしまわなければならない大きな仕事を抱えているので，これもすぐに着手することはできそうにない。

そういうわけで，このシリーズの全体を書物のかたちにまとめることは当分のあいだは不可能であろう。このシリーズに利用価値を認めてくださってきた読者の皆さんには申し訳ないが，これまでどおり既刊の『経済志林』各号でお読みくださるようにお願いする。

*　　*　　*

第3部第1稿の第5章についての拙稿を発表してから19年，第3部第1稿について書き始めてからはすでに20年が経過した。緩慢な仕事ぶりには

われながら呆れるほかはない。途中で幾度か中断することを考えたが，そのたびに思い直して，なんとか続けてきた。その最大の原動力は，拙稿を利用してくださる多くの読者があったことである。完結にあたって，拙稿を研究に使ってくださった皆さん，拙稿を肯定的に評価してくださった皆さん，気づいた誤記や誤植をお教えくださった皆さん，総じて，さまざまのかたちで筆者を励まし，支えてきてくださった読者の皆さんに，心からお礼を申し上げる。

(2002年9月30日)

正　誤　表

前稿（上）では，入稿を急いだために誤記・誤植だけでなく訳文にも不適切な部分を残していた。下記に掲げた訂正箇所のうちの重要ないくつかについて，数人の方から適切なご指摘をいただいた。記して謝する。

「「貨幣取扱資本」の草稿について」（本誌第50巻第3・4号，1983年）

頁	から	行	訂正前	訂正後
(293)	下	15	ausgedrücht	ausgedrückt
(304)	上	1	〔sachlich〕)	〔sachlich〕」
〃	上	12	〔bei ihnen〕〕	〔bei ihnen〕」

「『資本論』の著述プランと利子・信用論」（本誌第68巻第1号，2000年）

頁	から	行	訂正前	訂正後
124	上	1	S.435	S.434

「「貴金属と為替相場」の草稿について」（本誌第69巻第3号，2001年）

頁	から	行	訂正前	訂正後
152	下	14	Einfrhren	Einfuhren

「「資本主義以前」の草稿について（上）」（本誌第69巻第4号，2002年）

頁	から	行	訂正前	訂正後
172	上	10	金貸業者	貨幣の貸し手

177	上	7	没頭しているというのに	没頭しているのではあるが，またしても忘れられるのは
〃	上	9	前提だ，ということがまたもや忘れられるのである	前提なのだ，ということである
〃	上	11	らは[61]排除されている	らは彼の[61]地位によって排除されている
〃	下	7	挿入――「彼の地位によって」	「地位」―― Position → Stellung
180	上	8	剰余生産物	剰余労働 〔ここに，「「剰余労働」→「剰余生産物」」という筆者注をつける〕
187	下	1	たとえばローマ	たとえばルーマニア
188	上	1	たとえばローマ	たとえばルーマニア
197	下	12	ゲヌア	ジェノヴァ
〃	下	5	ゲヌア	ジェノヴァ
198	上	2	習償	習慣
206	上	14	卸売商業との要求	卸売商業の要求と
212	上	12-13	資本主義的生産様式の，近代的銀行制度の，これらの条件をつくりだす有機的創造物の先駆	資本主義的生産様式のこれらの条件をつくりだす有機的創造物の，〔すなわち〕近代的銀行制度の先駆
215	下	9	「394ページ〕	「394ページ」
224	上	4	一般的な簿記や社会的な規模での生産手段の配分	社会的な規模での生産手段の一般的な簿記や配分
〃	上	12	信用・銀行制度	信用・銀行システム
225	上	12	それは	それ〔信用・銀行システム〕は
226	上	16	そして実際にこの生産様式の	そしてそれは実際に
〃	上	19	小プル	小ブル

On the Manuscript for Chap. 36 in Book III of "Capital" by Karl Marx: "Pre-Capitalist Relationships" II (Concluded)

Teinosuke OTANI

《Abstract》

The preceding first half of this article presented a Japanese translation of the manuscript by Karl Marx for "6) Pre-Bourgeois Relationships" of Chap. V in his first draft of Book III of "Capital" based on text and annotations in the complete edition of the works of Karl Marx and Friedrich Engels, MEGA, vol.II/4.2. with commentaries by means of comparative study of Chap. 36 in the third Volume of Engels' edition: "Pre-Capitalist Relationships".

In this latter half the author investigates the contents of this sixth section of Chap. V of Marx's manuscript. At the beginning he makes clear its special feature as a historical consideration in contrast to the theoretical developments in five preceding sections, which are designated by Marx as "the dialectical form of presentation". Then he analyses Marx's inquiries under the following heads: 1. Usurer's capital as interest-bearing capital; 2. Genesis of usurer's capital and the characteristic forms, in which it exists; 3. Usurer's capital as destroyer of pre-capitalist modes of production; 4. The roles of usurer's capital in the genesis of capitalist production; 5. Battles for a compulsory reduction of the rate of interest; 6. Creation of the credit system by industrial capital for the subsumption of intrest-bearing capital; and 7. The historical meaning of credit system. With this article the auther concludes the series of his analytical investigations since 1983 into Marx's manuscript for Ch. 5 of Book III of "Capital" that Engels employed for Part V in the third Volume of his edition.